
流されながら自由に生きる、それが私のポリシーです。

高山直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流されながら自由に生きる、それが私のポリシーです。

【Nコード】

N8883S

【作者名】

高山直

【あらすじ】

面倒な事は避けるに限る、偉い人には逆らわない、好きな言葉は棚からぼた餅漁夫の利etc…。25歳OL鴻乃鈴、面倒くさがり且つ楽観主義な彼女は、ある日突然異世界に。その世界の政治的事情に巻き込まれちゃったけど、保身に走りながら一応程々に頑張る話。* * *とある引きこもりの学園生活。」と微妙にリンクしています。

今日は厄日です。

辺り一面に広がる緑豊かな森。

綺麗な声でさえずる小鳥たち。

日々ストレスをためまくって過ごすOL（私）にはとても心安らぐ場所である。

いや、私だけでなく、全国の九割のOLさんはそう感じるはずだ。だって近くに温泉もあるし。

なんかイイ感じにマッサージチェアも置いてあるし。

でも。

それは。

ここがちゃんど日本のだっかにある保養地ないし温泉宿という前提でだ。

そう。

つまり。

「……………ここはどこですか！」

時はさかのぼる事一時間前……………。

「……………！」

私の目の前で無情にも終電のドアが閉じる。

声にならない悲鳴をあげた私を横目に過ぎ去る電車。

くっ……………あの白い車体が憎い……………！

残業頑張つてフラフラな私にさらなる追い打ちをかけるとは…！
タクシーで帰るしかないではないか…！

「ううう。仕方ないか…」

ここにおいても無駄である。

時間の無駄。ひいては明日の仕事のモチベーションにも繋がる。さ
つさと帰ろう。

タクシーをつかまえるために駅を出た。
すると。

「……………ふえ？」

突然の浮遊感。え？あれ？なんで？

え…ちよちよっ、待ってゆーか何かどんどん空高く浮いていくんで
すけど？

今なら垂直跳び世界ー？

つていやいや何考えてんの私。…うわしかも徐々に加速ううっつ！

あー雲抜けた。息が苦しいなあ。視界ブラックアウト。

そしてーーー。

今に至るのである。

はい、回想終わりー。

ちなみに時間は腕時計と体内時計から推測しました。午前二時過ぎ。
お腹空いた私昼にカップ麺食べたただけだよー。
しくしく。

と、その時。

「…あれ、どちら様？」

森の中から美人のお姉さんが現れました。

今日は厄日です。(後書き)

6月11日、誤字補修。内容は変えていません。

鈴とかいてレイと読みます。(前書き)

2話目です。

鈴とかいてレイと読みます。

美人のお姉さんはルメニアさんとおっしゃるそうです。

真っ直ぐな黒髪を後ろで結び上げ、パンツスーツを格好よく着こなす姿はまさにThe・デキル女。ビバ・キャリアウーマン。

「で？あなたは誰ですか」

「私は鴻乃鈴トウノネと申します」

長年培われてきたOLスキルで素早く名刺を渡す。

「…はあ、ご丁寧にどうも」

若干戸惑った表情でそれを受け取るルメニアさん。ゴチですっ。美人の困り顔超レアっす！

「で、鴻乃鈴さん、それであなたは何故ここにいるのでしょうか」

ああもう冷静なお顔に。

じゃない、何ガツカリしてんの私。

「えー、それがその私にも何がなんだか」

「ふむ」

唸るルメニアさん。美人は何しても絵になるわあ。

「うーん、困ったな」

私もです。

「でもこのままじゃ埒があかないですし」

そうですね。

「うーん、仕方ないかな、うん、仕方ないよね」

はい？あのえっと勝手に自己完結されても。

「えー、目、閉じてください」

は？

「目」

即行で閉じました。一言に込められた威圧感半端ないです。人事部の主任思い出しました。

と、少したつて。

「開けていいですよ」

「……………!!……………っ!？」

驚きました。

とゆーかココどこですかパート2。
何かよくわからんものがごちゃごちゃ置いてあるし足の踏み場もないしえっとつまり一言で言うと。

汚い。

物凄く汚い部屋。しかも所々で爆発音が。

「あ、その辺に座ってください」

…座れるんですかねえ。

というかもしかしなくてもここ、ルメニアさんの部屋なんでしょう
か。

鈴とかいてレイと読みます。(後書き)

誤字、脱字がありましたら教えてください。

6月11日、表記の仕方を変えました。内容に変わりはありません。

第二の人生始まる予感。(前書き)

3話目です。

説明文を簡潔に面白く書ける人は天才だと思います。

第二の人生始まる予感。

「鴻乃鈴さん。ここはあなたが今までいた世界とは別の世界です。そしてあなたは元の世界に戻れません」

しばらく意味が理解出来ませんでした。

えーっと、これって何？夢？残業頑張り過ぎちゃって寝てた私？それともドッキリ？いやいや私こんなこと出来るような愉快な感性の持ち主且つこんなこと出来るような財力と暇を持った友人はいない。そもそも友達いないし。ってちょっと待て私寂しい事考えるな。まだまだ若いんだ。（これ重要）友達なんていくらでもできるさ！

「鴻乃鈴さん、百面相しくつてますけど」

いやいや話を戻せ私。えー何異世界？異世界つつたよねルメニアさん。じゃあ何私ったら異世界トリップしちゃったあははーみたいな？何故私？ていうか普通トリップってこう穴に落ちたり瞬間移動だったりするんじゃないの？私上に上がったわよアレ昇天じゃない。そもそも地球に何人ヒトがいると思ってるの？小さな島国のいたって普通のOLが何でこんなめにあうのよ！
あー頭痛い考えるの疲れためんどう寝たいなー。

「鴻乃鈴さん、戻って来てください。一から説明しますから。面倒だけど」

最後のおもいきり本音でしたね。

「まずこの世界について説明します。質問は後でまとめてお願いします。楽だから。私が」

もう何もつつこむまい。

「この世界は二つの大陸で出来ています。

一つはダイス大陸。

そして、ここ、ウイルアール大陸」

ほうほう。

「ウイルアール大陸は四つの国と、永世中立地帯の教導会で成り立っています。

一つは大陸の北にあるエナーシャ。

一つは大陸の南にあるキャメリアム。

一つは大陸の東にあるブルボン。

一つは大陸の西にあるクロシカル。

そして、ここ、大陸の真ん中にある教導会」

私地理苦手なんです。

「四つの国は昔から仲悪くて戦争紛争抗争が日常茶飯事。いつもドンパチやってて人口半減。儲かんのは武器商人だけって時代が二百年前くらいまであったんです」

今の話じゃないんですか。

「で、丁度二百年前、それぞれの国から一人ずつ、つまり四人の勇者が立ち上がって、どうやったんだか戦争を止めたんです」

勇者すげーよ。

「その四人の勇者の子孫は、各国で名門貴族となって、圧倒的な権力を誇っています。」

んー、王族の末席よりかは発言力高いかな？」

勇者の子孫すげーよ。

「教導会は勇者達が建てたんです。ここは絶対の中立地帯。どこの国もここでは戦争出来ないし、それに付随するアレコレが出来ません。」

ここは弱者の最後の砦です。

教導会という大きな学舎を中心に、勇者を慕い集まった者や、圧政から逃れて来た者が街を造りました。それが大きく広がって今に至ります」

へえ。

「四つの国は今では、まあ、結構仲良くやっています。表面的には。

……五年前、ちょっと色々ありましたが、もう落ち着きましたし」

後半かなりヤバそうでしたよ。

「この世界の超アバウトな説明は以上です。質問ありますか？」

そうですね。とりあえずは一つ。

「何でしょう？」

「世界観はざっくりですが理解出来ました。聞きたいのはこれだけです。」

「なぜ、私は元の世界に戻れないのですか」

「…今のところ、この世界の科学技術的に、異世界に行き来する事は不可能だからです」

とてもわかりやすい答えに納得しまし…ってちょっと待て。

「…え…でもじゃあ何で私この世界に来たんでしょう」

「ああ」

とてもわかりやすい答えに殺意が芽生えました。

第二の人生始まる予感。(後書き)

誤字、脱字がありましたら教えて下さい。

6月11日、表記の仕方を変えました。内容に変わりはありません。

第二の人生始まりました。(前書き)

不定期更新ですが、どうか見捨てずお付き合いしてください。

第二の人生始まりました。

私は、とりあえず当面は、ルメニアさんの家に泊めていただくことになりました。やったー。

しかし問題になったのは、私物であふれかえっているルメニアさんの家のどこに泊まるかという点。

（足の踏み場のないこの部屋、やはりルメニアさんの私室でした）
ルメニアさんの家は、バスルームとこの部屋しかないそうです。

なんでもダイニングとキッチンと部屋三つを（壁を壊して）一つにつなげたとか。

ちなみに大きくなった一つの部屋は完全に物置状態です。

あっ、ルメニアさんが渋々といったかんじで口を開きました。

「うー。仕方ないですね、片付けます」

……魔法がかかりました。

鈴ちゃんびっくり。

部屋の半分が超綺麗。

「よし。じゃ、その区画使ってください」

「いやいやいやいや」

おかしいでしょう。今何が起きたんですか。説明求む。e x p r e
s s p l e a s e .

「……ああ、今は私の試作品501号の”お掃除くん”にやっ
てもらいました」

ルメニアさんの手には赤い箱が。いえ、所々に突起が出てるから箱
もどきでしょうか。

「私、趣味で色々と発明してるんです。これは501番目に造った
自動掃除機。ボタン一つでご覧の通り」

最後テレビショッピングの台詞っぽかったです。
って違う。

ルメニアさん発明っていえそれはもう十分魔法の域ですよ。
地球じゃ全国の奥方様にモテモテ（古）で特許とりまくってガッ
ポガッポうふふ。

「いえこれは魔法ではないんです」

はい？

「純然たる科学です」

やけにきつぱり言い切るルメニアさん。

「この世界で魔法とはある三つの力を指します。

”聴く力”と”視る力”と”読む力”。

説明が面倒なんで、どんな力かは自力で調べてください」

えー！ー！ー！？

「私たちはその三つ以外を魔法とは呼びません。

あなたの世界では魔法のようなことでも、ここでは単なる科学です。

魔法は何の労力もいらずに生まれたときたまたま付随していただけの力です。

しかし科学とは過去の積み重ねで生まれるすばらしい力。

同列に並べてはいけません」

…はい。

ルメニアさんが科学に対して並々ならぬ情熱と愛を注いでいることがわかりました。

ーん？ということももしかして。

「この部屋の物って全部ルメニアさんの発明品…？」

「ああ、はい。そうです」

……。

ルメニアさんは加減というものを知らないお方のようでした。

第二の人生始まりました。(後書き)

お気に入り登録ありがとうございます。
頑張りますっ。

6月11日、表記の仕方を変えました。内容に変わりはありません。

私は二人目でした。(前書き)

話が進まない…。

私は二人目でした。

この世界に来て早十日。わかったことがある。それは…

？言葉が通じる。（いえ気づいてましたよ初めからあたりまえですよオホホ）

ウィルアーロ大陸はどの国も同じ言葉だそうです。私はこの世界に来た時からこの言葉を理解し読み書きも出来ていました。どうやら異世界トリップのセオリー通りになんかすごい力が働いたようです。ラッキー。

ちなみにルメニアさんは博識で、日本語を理解していたから名刺が読めたそうです。すごっ。

？実は以前にも異世界人が来ていた！！（驚愕の事実！！！）

何でもその人（男性だったらしい）私と同郷らしく（つまり日本人）ルメニアさんに日本語を教えたのはこの人らしい。五年前に来たらしく、当時彼やルメニアさん、その友人たちが必死で帰る方法を探したけど、わからなかったみたいです。（だから帰れないと断言したのねルメニアさん）

今その人は大陸のあちこちを旅してるそう。ちなみに連絡手段はないらしいわ。

でもちよつと納得。何でルメニアさんが見ず知らずの怪しい人間（私）に親身になってくれたのかすごく不思議だったんだけど、（普通関わりさけるわね）以前同じようなことがあればねえ、まあ耐性はつくわね。

？科学技術力半端ない。

ルメニアさんが私を森からここへ運んだのは魔法でも何でもなく「科学」だそうです。某ネコ型ロボットもびっくり。詳しく説明してくれたんだけど、全然わかりませんでした。私大学文系専攻だったし。日本にあった科学の産物は、基本もつと便利になってこの

世界に存在してるわね。携帯とかね。（前異世界人さんは携帯嫌いらしいわ）

私が最初に目覚めた場所は教導会の一画にある”グラジオラスの森” といつて、前異世界人さんも最初私と同じ場所にいたらしいわ。

……うーん、他にもこの世界の時間感覚は元の世界と同じだとか、私はとりあえずルメニアさんの助手ってかたちで落ち着いたとか色々あるんだけど、それはまた追々。

私は二人目でした。(後書き)

アクセスしてくださった皆様、ありがとうございます。
拙い作品ですが、お付き合いいただけたら幸いです。

この世界って美形しかない。(前書き)

やっと新キャラ登場です。

この世界って美形しかない。

この世界に来て二週間がたちましたってもういやこの表記面倒。
この十四日間の間にいろいろこの世界について調べたりとかルメニアさんのお手伝いとか本当に色々頑張りました。ええ頑張りましたとも。

私面倒なこと嫌いだけど、最低限の知識はないと、もっと面倒なことになるたりするしね。

ふふふ。自分を守るためならなんだってしますともつ。

まあでも危なくなったらルメニアさんが華麗にフォローしてくれるでしょう何とかなるわという気持ちでのりきましたよ。

さあ今日もおばちゃんたちの井戸端会議という名の無料情報提供所に行くわよ私とルメニアさんに一言声をかけようとしたら。

シャツにタイトなジーンズ。白衣を羽織ったルメニアさんが。

「鴻乃鈴さん行きますよ」

フラァッと外に出ていきました。
って。

いや待ってよ何処に？

ていうか今の今まで機械いじってたよね。

その行動原理は何。

あーもうさっさと行ってるし。ルメニアさん結構自由ですよね。

「何処に行くんですか？」

「書庫」

そしてそっけないです。

そのまま無言で歩くこと十五分。

「着きました」

ルメニアさんがその一言とともにドアを開けー

「初めまして鴻乃鈴さん。そしてルメニア久しぶり」

閉めました。

………え？

ガラッ。

向こう側から再び開くドア。

「ひどくない？顔見た瞬間閉めるって。変わんないな、ルメニア」

黒髪美形のお兄さんは天使の微笑みで言いました。

書庫。

ルメニアさんが言っていた言葉はもうこれ以上ないくらいこの場所を的確に表していた。

辺り一面本本本。360度本ばっか。そしてその本にかろうじて埋め尽くされていない場所にちらほら机と椅子が。

黒髪美形のお兄さんにながされ、その一つに座る。

「…ロクシーとリストは？」

不思議そうに聞くルメニアさん。

「二人は仕事で遅れるって。カザン教授につかまったらしい」

「ああ…納得」

ふむ。二人の会話から察するに、あと二人はこの場に追加らしい。

「鴻乃鈴さん、ただ待つだけじゃ暇でしょ。色々お話ししない？俺と」

うお。この人爽やか硬派な外見に反して結構軽そうな人ですねえ。

「俺、サジュ・デーン。サジュでいいよ。鴻乃鈴さんのことはルメニアから聞いている。俺とルメニア、後から来るリストとロクシーは君の事情を知ってるから、色々手助けできる。俺たちにとったら異世界人は二人目だからね。前回と違って慣れてるし、今回は女の子だからやる気もあるし」

と、いうことは、サジュさんたちが前異世界人さんを元の世界に返すために奔走したルメニアさんのお友達ですか。

うーんそれにしても軽いなサジュさん。ルメニアさんこういうタイプの人と親しいって意外。

「…なんか俺に失礼なこと考えてない？」

うふふふ嫌だなあサジュさんそんなことあるわけないじゃないですか。

「…ま、そういう事だから。俺らのことは信用してくれていいよ。

…というか今の話は全部ルメニアがするはずだったんだけど……やっぱ言ってなかったか」

サジユさんの呆れを多分に含んだ視線を受け、ルメニアさんが視線をずらす。

「……………面倒だった」

ちよつとルメニアさん！

今ぼそつと何て言いました！？

さすがに私そこまで面倒くさがりじゃないです！

あなた絶対呼吸するのめんどくさいって言うタイプですねっ！？

「いやさすがに呼吸は面倒がらねーだろ」

「遅れたから悪いと思って急いできたのに……なにアホな話してんのよ」

そんなつっこみとともに、金髪のチャラそうなお兄さんと赤毛のキユーティーお姉さんが現れました。

この世界って美形しかない。(後書き)

やっと話が進みそうです…。

6月11日、表記の仕方を変えました。内容に変わりはありません。

10月23日、誤字修正。

うーん23歳って旬。(前書き)

私事で更新がだいぶ遅れてしまいました。

土日も更新します。

うーん23歳って匂。

赤毛キューティー美女がロクシーさん。金髪チャラ系イケメンがリストさんでした。

ロクシーさんとルメニアさんは親友で、サジユさんとリストさんは双子の兄弟だとか。

ふーん。

「……………ちょうどよく男女二組ずつですねえ。もしやお付き合いされているのですか？」

女子はいくつになっても恋バナ好きな生き物なのよ。

「……………一——一——一——つええ！？ちよっ違いますよ私別にリストとつつつ付き合ってたなんか」

……………。

やだ何ロクシーさん超かわいい。

「私別にリストさんとなんて一言も言ってますんよー？」

「あ」

「ふーんでもそうなんですか。リストさんと付き合ってるわけじゃあないんですね？じゃー私チャーンズ。リストさん超タイプなんです。ガンガン押しちゃおっかなー」

「えっ！？それはダメです！リストは私の……」

「『リストは私の』？」

真っ赤な顔のロクシーさんの最後の言葉を復唱する。

「え……ええええとあのその」

「俺も気になるなーロクシー」

お。リストさん参戦。このいじめっ子め。

「……………っ！！！！！！！！！！」

ロクシーさんは更に真っ赤になって顔を伏せてしまいました。

「つぶ、あはははは。やだなあ冗談ですよロクシーさん」

「く、くく。君なかなかイイ性格してるねえ」

「あははー何故かよく言われますー」

「……………それくらいにしといてあげなよ」

そう言っつて私とリストさんにやんわり注意したのはサジユさん。

…ん？ここは親友であるルメニアさんが寝るべきでは？

「ロクシー、あなた本当にリストが絡むとダメね。あんた達二人を
教導会内で知らない人はいないでしょう。今更何恥ずかしくてん
のよ。あんなに公衆の面前でイロイロしてたのに」

一番の親友がトドメを刺しました。
わあおルメニアさん鬼畜。

それにしてもイロイロってなんでしよう超気になります。

「ふむふむ。ロクシーさんとリストさんがバカップル（あれ？死語？）なのはよくわかりました。

ルメニアさんとサジュさんはどーなんですか？」

「うん？いや、私たちは別にそういう関係じゃあないね」

「俺とルメニア？あーないない、それはない」

あっさり否定されました。

矛先を変えましょう。

「えっ……！？いやそれはないんじゃないでしょうか」

「……………あーうん。違う違う」

なんですリストさんその微妙な間は。

「…まあどうでもいいんですが」

「鴻乃さんうっかり心の声漏れてます」

は。しまった。

「…そんな事より」

「コーノさんが最初にふつたんですよ!？」

ロクシーさんを怒らせてしまいました。

きゃー、ごめんなさーい。

…ん?でもなーんか違和感。

「…すみませんロクシーさん。もう一度私の名前呼んでくれます?」

「?はい?コーノさん」

んんんひろがる違和感。

眉根を寄せた私に気付いたリストさんが説明してくれた。

「あー、たぶん発音の事だな。俺とロクシー…つかこの世界の大概の人間にはあんたが前いた世界の言葉は発音しづらいんだ」

「でも、ルメニアさんとサジュさんは普通に話してましたけど」

「こいつらは特別。前こつちの世界に来た奴にルメニアが言葉を教わって。で、なまじこいつありえない頭してるもんだからすぐ話せるようになって。んでルメニア達が二人で話してる内容がわからなくなつた事に苛立ちを感じたサジュが俺にも教えるってなって言葉をマスター。…いや、ありえねえよ二人とも。一週間で覚えたんだぜ?」

途中ルメニアさんとサジュさんと前異世界人さんとの間に微妙な恋愛フラグが立ったことまで教えてくれてありがとございます。あなた無駄に話長いです。そしてわかりづらい。

「余計なことまでべらべらと。うるさいよ?」

トコトコ。

…サジュさんそれ笑顔じゃないデス。

うーん23歳って句。(後書き)

あれ……恋バナで終わっちゃったぞ？

6月11日、表記の仕方を変えました。内容に変わりはありません。

10月23日、誤字修正。

顔がイイのはたいがい裏がある。(前書き)

鴻乃鈴さんに三人について語ってもらいました。

顔がイイのはたいがい裏がある。

ところ変わって食堂に。

教導会の職員が利用するカフェみたいですね。

私職員じゃないけどいいんでしょうか。や、でも一応ルメニアさんの助手だからいいのかな？

「あー疲れた。マジ疲れた。俺過労で死んじゃうー」

「腹減った何か食おーぜー」と言っただけで食堂に場所を移させた張本人が愚痴った。

「…どうかした？リスト」

一応聞いといてやるかという表情＋棒読み口調のサジユさん。

「おおよく聞いてくれたサジユ。カザンのアホが俺らに超面倒な仕事押しつけやがったせい」

「ああ。教授らしいね」

「ネチネチネチネチ嫌み言いやがってあの頭髪不毛野郎。ざっけんなよ」

「そんなのいちいち気にするなよ。現にロクシーは何とも思っていないんだろ？」

「ええ。まあね。…でも教授、私にはそんなに絡んでこなかったわ

よ?」

「へえ」

「ああああああ殴ってやりてええええ」

「珍しいねえリスト。お前がそんなに苛つくなんて」

愚痴愚痴言い合う三人を華麗に無視してちゃっちやとオーダーとるルメニアさんはすごいです。

しかもその後どこからか本を取りだし読み始めました。

「ストップストップ。この話はお終い。ごめんねコーノさん、聞き苦しいものを」

「いえいえお気になさらず。カザン教授の噂は聞いていますし」

「え?」

「教授の次は室長になりたかったのに、助教授にその座を奪われ面子丸つぶれ。

将来有望な若者に難癖つけるのが趣味の性悪アラフォー教授。独身。女好き。

今のねらいは強力な番犬の付いた笑顔のかわいい赤毛の学芸員さんと、奥様方の間で今一番の話題です」

「……………は……………?」

「あれ、ご存じないんですか？強力な番犬リストさんのついた赤毛ロクシーさんの学芸員さん。

おそらくリストさんはそのせいで目をつけられてしまったんですね。目の上のたんこぶ的存在ですから」

「……ああ、それでかリスト。苛つきの本当の理由。余裕のない男は嫌われるよ？」

「うつせーよサジユ！つか本っ当に気づいてなかったのかよロクシー……！」

「……ええええっ！？……ええええ？」

あははは皆さんいい歳した大人が公共の場で騒いじやいけませんよ？

「てことは鴻乃さん、ロクシーとリストの関係も知ってたね？」

「あ、はい勿論。ロクシーさんの反応は意外でしたが。……かわいかったなあ」

「コーノさんっ……！」

「……イイ性格してるよ本当。そしてその情報力は恐ろしいなあ」

「だって皆さん有名人ですし。サジユさんのこともいろいろ聞いてますよお？」

「…………知りたくないなあ」

「ふふつ。私を知る皆さんの情報公開しちゃおうじゃないですか。
…ではまずロクシーさん」

指名されたロクシーさんがビクツと肩をゆらす。

「ふわふわの赤毛と神秘的な蒼と翠色の瞳が特徴の、笑顔のかわいい学芸員。

明るくハキハキした性格で、近づく男は数知れず。

同性にもすかれ、友人関係も良好。

熱心に仕事もするので同僚からの信頼も厚い。

恋人のリストさんとは周囲にかまわずイチヤイチャだし、その邪魔をした者にはリストさんから笑顔で地獄を見せられることから二人の間に入れる者は誰もいないとか」

「「「……………」」」

あら皆さんどうしました？

「…あーうん。凄いな。うん、ほんと実際その通りだよ」

「……………地獄…邪魔…イチヤイチャ…」

「…なああんたその情報力活かして俺の害虫駆除手伝わねえ？
いくらでも湧いてくるんだよ、害虫」

一人は半ば自失した独白ですが、見事に三者三様の答えが返ってきました。

リストさん、私の情報は高く付きますよ？

「うふつ。じゃあ次はリストさんとサジユさんですね」

うつ…と言葉に詰まる男二人。

「金髪碧眼王子様な外見に、軽い性格で女性を次々たぶら…失礼。魅了するリストさんと、黒髪碧眼、硬派で爽やかなサジユさん兄弟。家柄・血筋・容姿・頭脳全てに秀で、独身女性が鶉の目鷹の目と狙う超優良物件。」

精力的に仕事をこなす一方で、休日には同僚・友人と連れだって遊ぶ振り幅の広い性格で、老若男女問わず高い人気が。

…初めて聞いたときには驚きました。いるんですね、こういう人。

…漫画や小説の住人じゃなかったんだなあ」

「いやーそれほどでも」

「あら？まだ終わりじゃないですよ？」

「「え」「」

だってさあー、最近の漫画や小説って、そういう完璧な人にはイロイロ裏があるタイプが多いのよねー。

だから。

「ここからは私の主観込みなんですけど。」

ロクシーさんは一見か弱くいじられやすい純真キャラですけど、実

は結構したたかですよ。
まあ天然なところも鈍いところも嘘ではないんですが、それだけじゃないって感じがします。

リストさんは女性関係派手ですけど、結構醒めてるタイプかなあ…と。

何て言うんでしょう、人間不信？みたいな…それでも派手に遊んでるのは女性を手頃な情報源とも思っただけ接してるんでしょうねえ。

サジュさんは爽やか好青年で通ってますけど、それ演技じゃないですか？腹黒さんで周り騙して嘲笑ってるイメージです。………なんか…純・黒って感じですかね」

思ったこと全部言っちゃいました。
だって私二面性のある人嫌いなんだもん。ロクシーさんはそうでもないけど。

「ふーん…言うねえ君」

…うわあお。笑顔が黒い。

「…おもしろいなあホント。レイちゃんて」

…い、いやん。ほめられちゃった。

「凄いです。初対面でそんなこと言われたの初めてです」

…えーっと、キラキラってかキラキラしてます目が。

「……どうでもいいけど早く食べねば？私もう食べ終わったよ？」

異様な雰囲気的空間に、ルメニアさんの文字通りどうでもよそそつな声が響きました。

顔がイイのはたいがい裏がある。(後書き)

6月11日、表記の仕方を変えました。内容に変わりはありません。

たぶん大丈夫です。(前書き)

なんか主人公の性格が予定から38度くらい逸れた方へ突っ走ります。

あれ……？

たぶん大丈夫です。

「あんだ達あれだけ話し込んでたのに肝心なことは何一つ話してないのね。」

「何やってんのよ馬鹿じゃない？」

淡々とした声が余計怖いですルメニアさん。

「……や。あのもルメニアさん。ルメニアさんだつて料理届いたの知ってたなら教えてくれればよかつたじゃないですか」

はむ。このサンドウィッチみたいなのおいしー。

「そうよルメニア。何あんただけ先に食べてんよ」

「お腹空いてたの」

う……そう言われると反論しづらい。

「おう。そういえばレイちゃん」

……レイちゃん？

「よくねえ？俺のが歳上だし。」

つかさつきもそう呼んだけど何も言わなかつたじゃん」

歳は一つしか変わりませんよ。それにさつきは皆さんの醸し出す空気が恐ろしくてそこまで気が回らなかつたんです。

「それでレイちゃん」

うああ決定。これ決定事項だああ。

「俺とサジユ、ロクシーについちゃあ言いたいこと言った感あるけど、ルメニアについてはまだなーんも言ってるねーよな。何かねーのか？」

「あ。俺も気になる」

「私も」

しかし当の本人は興味なさげです。

「あー…。ルメニアさんですか？

…うーんルメニアさんはあまり奥様方の噂話に登場しないんですね。

せいぜい『変人』『研究オタク』『踏まれたあい』くらいですか…」

「いやおい待て最後変なの入ってたぞ！」

「ルメニアさん、あんまり外に出ないし進んで目立ったことしないし基本機械いじってばっかだから、ネタが少ないんですよ。でも奥様方がルメニアさんに好意的なのは伝わりましたよ。愛が感じられました。」

ちよっと変わってるけど、素直で優しい自慢の娘を語る親って感じでしたね」

「『踏まれたい』が……？」

「ルメニアさん頭イイし美人さんだし家柄もいいから、男の人にモテモテですよね。」

『お姉さまぁ』と慕う女性も多数。

そしてルメニアさんは裏表なく人に接してるし、基本優しいから私も大好きです」

「俺の言葉はことごとく無視…？」

「あははー。ルメニアはって事は、俺らはあんまりお気に召さない？」

「そうですね。私裏がある人ってダメなんです。」

それに皆さんとは会ってからせいぜい二時間くらいしか経ってませんしね。そこで好悪は決まりませんよ」

「成程ね〜。でもまあ、これから機会はいくらでもあるよ？俺のと知る」

うわぁ殴りたい。

「…また話逸れてるわよ」

ルメニアさん若干イラっとしてます。

パンツ。

「……うおっビックリしたあ。ロクシーさん何故いきなり手を叩いたのでしょうか。」

「仕切り直し」

「そつね。さっさと本題移ろつ」

「……女性陣カツコイー。」

「はい。じゃあレイちゃん。これから俺たちが言うことを絶対守ってほしい」

リストさん真面目モード。

「一つ。絶対自分が異世界から来たことを人に言わないこと。
二つ。王家と四家には関わらないこと。
……っと、四家ってわかる？」

馬鹿にしてんですかリストさん。

「勇者の末裔の一族ですよ。ロスト家、デーン家、カシル家、

シュミレイ家」

「…うん。ホントよく調べてあるね。説明が楽」

「でもリストさんとサジユさんディーン家の人だし、ルメニアさんだってロスト家の人じゃないですか」

「「「「」」」」」

「…あーうん。それも知ってたか。…そういやさつき家柄血筋もいって言ってたしな。…うん。そう。俺らやルメニアの一族は性悪ばっかだから。無害な奴もいるけど超少数だし。…そういうのは後々紹介する」

「そうですね」

「…あっさりしてんなあ。…で、君には今まで通りルメニアの助手としてここで働いてもらいたい。教導会職員の肩書きがあった方がなにかと便利だし。…ルメニアに生活能力がいたら儲けもんだし」

最後の言葉にもものすごく何か大きな物が込められていましたね。

「まあ以上の事を守ってもらえれば、他は何してもいいよ。

俺らは前来た異世界人と連絡とってみる。…なんとかする…。…
くそシオンの奴携帯くらい持つとけよ。

…ああ、勿論帰る方法も探すぜ？」

ふーん。

「何か質問は？」

「いえ特に」

「」「」……………「」「」

「…随分あっさり頷くんだね。自分のことだよ？」

「何を言っんですルメニアさん。」

皆さん超優秀な方々ですもん。信頼してるんです。

だからまあ私が特に何もなくても、何とかなるんじゃないでしょうか」

「それは信頼じゃなくて、色々丸投げしてるだけでしょう」

ぐは。ルメニアさん毒舌。

たぶん大丈夫です。(後書き)

主人公の軌道修正に尽力しましたが不毛な結果になったような…。

リストさんの口調も定まりません…。

やっちゃった。(前書き)

話がやっと進む…かも？

やっちゃった。

ピンチ！超ピンチ！

25歳OL鴻乃鈴、只今絶賛襲われ中です。

あー何でこーなったんだろ。アレ？私何もしてないよ？

ただ食堂で自由解散になって寄り道しながらルメニアさん家^ち向かってただけだよ？

それが何で。

「うらああ待て女あああ」

「追われてんのに待てと言われて待つ馬鹿はいないわっ！！」

筋骨隆々ムサイおっさんズ（複数）に追われなきゃならんのです。

理不尽だっ！！！！

がっ。

「わわっ」

「はっ。手間かけさせやがって」

……非力な乙女^{わたし}は囚われの身となってしまいました。

「で、ここ何処よ」

うわー成金趣味ーダサー。床壁天井金ピカにする意味わかんないー。
落ち着かないじゃない。

「ふ。女。お前か異世界人とやらわ」

そう言ったのは目の前に座るおっさん。

えー随分ずんぐり…じゃない、ふくよ…違つ。…恰幅のいい…？ -
ああ、貫禄のある！そう！貫禄のある方。

サイドにはさっきのおっさん達が控えてるし。

偉そーな人だなー。

「私はキャメリアム・セントハイム・オブディシス・クロークである」

長つ。

「キャメリアム王家に連なる者なのである」

ふんぞり返るクロちゃん。

すかさず拍手を送るおっさんズ。

わーリアルで偉い人なんだクロちゃん。

…ん？つかキャメリアム王家…？

おうけ…オウケ…王家…って…！

うわーしまった。注意されてからまだ一時間も経ってないのに！

どーしよどうしようつろルメニアさん達に怒られるうつろ。

わーんいやでもそもそも帰れんの私！？

「どうした女。何か言いたげだな」

当たり前だ空気読め馬鹿。

「いえそんなとんでもないですわ。私のような下々の卑しい人間があなた様のような高貴なお方に声をかけていただくなんて身に余る榮譽に感激で震えているんですのオホホ」

うん震えてんのはホント。理由は違うけど。

「ほっほっ。なんじゃ、道理をわきまえておるではないか。あんの忌々しいシオンと同郷だと聞いておったからどんな野蛮人かと思っておったら…うむ。なかなか気に入ったぞえ」

なあーんですってえ気に入ったあ？ちよつとふざけてんのこの親父。冗談は顔だけにしてよ。今すぐその口縫ってさし上げましょうかあ？

「有り難いお言葉にございます」

あー本っ当に縫いたい。誰か針と糸。針と糸を…！

「ほ。女、ほんに気に入った。…殺すつもりでおったがやめた。

代わりに私の手足となり、あの虫けら程の存在価値も見いだせぬ、
くそ忌々しい三王家と四家の内情を探って参れ…！」

力強く言い切ったクロちゃん。

…えーっと………スパイになれと？

…。うん、というかこの人馬鹿じゃない？

今の今まで殺そうとしていた人間にそんな重役まかせんの？

つか無理でしょ。普通に無理でしょ。素人の私は勿論、プロでも無理よその命令に従うの。

…でもここでそれを言ったらバツサリやられちゃうんだろーな！。

「はい。わかりました」

こつ言っしかないじゃない！

「ふふ…お前達、解放してやれ」

『はー！』

縄が解かれ、はれて自由の身となりました。

「ふ、私との連絡手段などの説明はこのクレヴォールに一任する。
物わकारいの良い女で助かったわ。私はもう本邸に帰る。…この別邸
はいかんの。地味すぎるわ。…では任せたぞよクレヴォール」

「……まあ、いい。俺があの豚に誠心誠意尽くしてるとかふざけた事思ってる訳じゃなさそうな面だからな。上出来だ」

思わず眉をひそめる。

「はっ。俺もお前と一緒にだよ。あいつには適当なことと言って常に腰低く振る舞ってんぜ？本当の主の為に」

さつきから気になる単語連発ですねえ。

ふふっ、ちよつと落ち着いてきましたよ私。

社会人はいついかなる時も冷静に。

まあ、とりあえず。

「クロちゃんへの態度、演技だったってバレバレてますねえ。

というか、バレない方がおかしいんですけど。普通信じませんよね、自分を攫った人間にあんな態度とつたら」

そう言うと、クレヴォールさんは苦笑した。

「あいつの阿呆は死んでも直らん。側近達も右に同じ。外見だけでなく頭ん中まで筋肉さ」

あなたも同じような外見ですけどね。

「お嬢さん、今俺に失礼な事考えたな？」

まあそんなまさか。

「目え逸れてんぞ。……ふん、まあキヤメリアム王家の恥のことはどうでもいい。お嬢さん、あんたもあいつの言ったことは無視していいぜ。俺が適当に報告しといてやるから」

「!？」

「俺は現キヤメリアム国王の近衛だ。あの方の命でここに来た」

国王…いきなり大物じゃないですか。

「お前に国王直々の頼みがある。それで接触の機会をうかがっていた。…が、お前にはあの四人がついていたからな。警戒網がひどく厳重で、とてもじゃないが近づけなかった。」

だからあの馬鹿の部下としてこうして回りくどい方法で会いに来たのさ」

あー…成程。たぶんクロちゃんは王家といっても末端の末端の人なんだろう。そしてあのアホさ。ルメニアさん達の警戒対象に入ってなかったのね。

そこに目をつけられたと。

うーん、キヤメリアム国王とクレヴォールさん達のが上手だったな。というか一番気になるのは、私が異世界人だということが結構広範囲で広まってそうって事ね。

あーあ。

私の表情で現状を理解している事がわかったんだろう。

クレヴォールさんは「話が早くて助かる」とか言いながらクツクツ笑った。

「で、お前への頼みというのはな、”前異世界人、シオン・スバルを探してほしい”だそうだ。
ま、頼みとは言っても、断ればこれだがな」

首の前で手を横に動かす。

…斬首ですか。

「…拒否権が与えられないのを頼みとは言いませんよ?」

「お前達は今シオンを探しているだろう。見つけたら連絡すればいいだけじゃないか」

バレてるし。

「…見つけてどうするんですか」

「それに答える義務は無いな」

なかば予想通りの答えが返ってきましたよ。

「……………連絡手段は?」

ニヤ。

クレヴォールさん超悪人面。

「賢い選択だ。…これを渡しておこう」

差し出された物はー笛?

「見つけたらこれを吹け。それだけでいい」

あー、ピーターパン2みたいなの。

「……………見つけれなかった場合は？」

「それは想定していない。絶対見つかる。これは確かだ」

その根拠は何よ。

「くく…。外まで送ろう」

くそおう。

「クレヴォールさん、これだけは言わせてください」

「……何だ？」

「か弱い女性にはんばん殺気だして脅すなんて格好いい大人の男とはいえませんか」

呆気にとられたような沈黙。

次には笑声が。

「…くつ。覚えておこう」

ふーんだ。

やっちゃった。(後書き)

申し訳ありませんが、私事で7月9日まで更新を停止させていただきます。

見捨てずお付き合いしてください。

恐るべし上司スキル。(前書き)

長らくお待たせして申し訳ありません！

今回ちょっと短いかも…次回は長いのでっ。

恐るべし上司スキル。

「コーノさんっ」

ロクシーさんに抱きつかれました。
至福。

「なんでニヤニヤしてるんですっ。大丈夫でしたか!？」

ウルウルした目で見つめないで下さい。
殺人級の可愛さです。

「だから大丈夫だつて言ったでしょう。というかロクシー、そろそろ鴻乃さん放してあげたら？
リストが射殺さんばかりに睨んでるけど」

「え？」

ルメニアさんの言葉に二人でリストさんを見る。

「ん？」

微笑み返されました。

「別に全然睨んでないじゃない」

ルメニアさんに向き直るロクシーさん。
でも。

私は見てしまいました。

ロクシーさんの視界からはずれたリストさんがいつそ清々しいほど凶悪的な笑みをうかべたのを。

「え？何ですか？」

ロクシーさんに自分から抱きついてみました。

笑顔でリストさんを見ると、目が笑ってない笑顔が返されました。よくわかっていないながらも、抱きしめ返してくれるロクシーさん。それを見て更に眼光が鋭くなりました。

……楽しい。

「リスト、さすがに異性相手に嫉妬はみっともないよ。それから鴻乃さんも挑発しない」

エンドレスに続きそうな戦いに終止符を打ったのは、やはりというかサジュさんでした。

「そうだったんですかー」

私がクロちゃん一行に連れ去られた後のルメニアさん達の行動は、聞いていて驚きの連続でした。簡単にまとめると。

？なかなか帰らない私を心配したルメニアさんが他の皆さんに連絡？皆さんで情報収集

? クロちゃんに攫われたっばい

? ルメニアさん あーじゃあ大丈夫ね。その内帰ってくるわ あっさり捜索打ち切り

サジュさん ルメニアがそう言うなら大丈夫だね ルメニアさんに追順

ロクシーさん えええ? 何でそんな余裕なの? 誘拐よ誘拐、助けに行かなきゃ ルメニアさんを詰る

リストさん 落ち着けよロクシー。でもルメニア、大丈夫って根拠があるならちゃんと説明しろよ 大人な対応

? 鴻乃さん(=私)が帰ってきたら同じ説明しないとイケないのよ 嫌よ面倒と言うルメニアさんを責めるロクシーさんとリストさんで 激しい口論(一方的だけど)が繰り広げられている所に私がひよっこり登場。

……………うん。

? まででは良しとしよう。

? とかそんなあっさりわかつちやうんだってつつこみもひとまず置いてこつ。

どー考えても問題は? と? だろ。

うん、ホントロクシーさんは心のオアシスだよ。

今日会ったばかりの私をそんなに心配してくれるなんて感激。

リストさんもさっきはゴメン。あなたの反応楽しくてつい遊びすぎたけどこれからは自重する。出来る限り。

ーそこまで考えおもしろいっきり叫ぶ。

「……ひどくないですか? ルメニアさんっ!!!」

今の話聞いた限りでは貴方の反応一番ひどいじゃないですか! 一番長く私といたのに! しかも面倒だから説明しないって! うわーん ルメニアさんの鬼畜人でなし放置プレイ大好きDS人間ー!!!」

はあはあ。

「サジュさんもサジュさんですよ！何ですか何なんですか貴方『ルメニアが大丈夫って言うなら大丈夫だね』って。そこは疑問に思いましたよ！問いつめましようよ！貴方ルメニアさんが鹿を馬って言ったらうん馬だね〜って絶対言いますよねアレ逆だったっけもういいや別にあんたは秦の某宦官の取り巻きかー！！！」

あーのど痛い久々に叫んだからだなくそお。

「ごめん」

「ごめんね？」

ぶちっ。

「謝って済むなら警察はいらないんですよ！？つかサジュさん疑問系じゃないですか！誠意見せんなら物で払いやがれっ！！謝罪なんか何の得にもならんわっっ！」

「鴻乃さん落ち着いて。その台詞超悪役だから」

はっしまった。そう落ち着くのよ私。社会人のマナー、鉄則、いついかなる時も冷静につ！！

さあ大きく深呼吸。スーハースーハーよし。

「失礼しました。先程は取り乱してしまい申し訳ありません。お手数ですがルメニアさんが大丈夫と思った根拠をお聞かせ願えないでしょうか」

「ええ。いいわよ。元から鴻乃さん来たら説明するつもりだったし。二度手間が嫌だっただけ。」

それから鴻乃さん、私は貴方の上司でも取引先も重役でもないからね？冷静になつてはほしかったけど、慇懃無礼になつてつて言つた訳じゃないからね？」

やりづらい…と苦笑するルメニアさんに、私はあわてて謝つた。

……ん？

なんかルメニアさんが私を許すみたいな構図になつてるけど私何も悪いことしてくない？

普通逆よね？今までの話の流れ的に私が許す側に立つはずよね？

ビミョーな顔でルメニアさんを見ると、うん？といったかんじで首を傾げられました。笑顔で。

……決まりデス。

ルメニアさん確信犯。

その場の流れを全部自分の方へもつてつて自分に都合良く変えるとかどんなテクニシャンですか。

…うん。ルメニアさんは敵に回さないようにしよう。

今更ですが私最近不幸ですよ。(前書き)

今回、一部男性読者様が不快に思われる可能性のある表現があります。

許せる読者様だけお進み下さい。

今更ですが私最近不幸ですよ。

「クロークは私の知り合いなの」

ルメニアさんはあっさり言いました。

……………はい？

「だから、知り合い。割と親しい。

それにアイツ知能低いフリしてるけど結構したたかで頭回るよ？
人間性も信用できるから、クロークに攫われたのが分かった時点で
下手に手出しする方が危険かなって」

……………はいいいい！？

「……………初耳」

「私も」

「俺も聞いたこと無い」

「だって言ったこと無いし」

ちよ、だからルメニアさん何故にそんな淡々と。

「うん？別にいちいち皆に報告する程重要な事じゃなくない？」

「でもクロちゃんってアレ一応王族ですよ！？」

思わず叫ぶ。

いくらルメニアさんが王族の末席を凌ぐ発言力を持つロスト家でも、それはルメニアさんの実家があるクロシカル国でだ。キャメリアム王家のクロちゃんと同じ合うとか！普通に考えて無いでしょ！そ、そりゃ有力貴族だったら他国の王族と会う機会はあるかもだけどつ……てああもー分かんない私一般庶民だもんそんなやんことなき身分の方の生活事情なんてしらねえですよっ！！ 混乱中

いつもならこの辺でルメニアさんが落ち着いて鴻乃さんってなつて有耶無耶になるんだけど、何故か今日は何時まで経ってもその言葉がない。

…ルメニアさんに顔を向けると啞然とした表情をしていました。

……………何で？

普段の私ならその珍しいお顔を存分に愛でるんだけど、残念ながらちよつとその余裕が無い。

そしてそのまま数秒経過し……………。

「……………クロちゃん？」

一言疑問符と共に言われた言葉に瞬時に正常な思考回路が覚醒。

……………そ、そうだよ…クロちゃん王族なんだよ……………。私の中で既に定着してたからつい言っちゃったけどコレ不敬罪とかで罪に問われるレベルなのかな……………？

あわわわわどうしよう。

そんな感じでまた混乱してきた私に驚きの一言が。

「……………それ最高」

……へ？

見るとルメニアさんは笑いを堪えようと肩をふるわせながらうんうんと一人頷いている。

「鴻乃さんナイスネーミング。だよね、あいつクロちゃんって顔だよね」

……あれ？

「…俺ソイツの顔見た事あるけど、別にクロちゃんって顔ではないだろ」

それまで私とルメニアさんの間の異様な雰囲気呑まれたのか一言も声を発しなかったリストさんが言った。

「性格と照らし合わせるとお似合いなの」

ルメニアさんの答えに釈然としない様子で首を捻る。
まあ、あれは本人と話さなければ分かるまい。

「…クロちゃんって名前が似合う50代ってどうなの」

「……あー…、うん。いやまあ親しみやすい…と思えなくもない…かな？」

「フォローしきれてないわよ」

ボソボソロクシーさんとサジュさんが話しています。

リストさんがサジュさんを睨んでるけど今の私にそれをいじる余裕

はありません。
だって。

「50代つつつ!?!」

まじ!?アレが!?

確かに中年太りでメタボ検診ギリout跳び越え余裕でoutだったけれどもっ!

髪の毛薄くてちよつと脂ぎっててカレイシユウとかしてそうだったけれどもっ!

でももっ!

なんかこう雰囲気若々しいっていうか顔もそこそこ整ってたし目もクリクリしててちよつと可愛かったしアホ子さんだったけどだからこそ馬鹿な子程可愛いってゆーのかなーとか思ってたのにつ!いやまああの口針と糸で縫いたいとは思ってたけどってそれはともかくつまり何が言いたいかというととも50代には見え……………。

「あいつロリコンよ?」

「マジ!?ちなみに守備範囲は」

「10から20」

「自分の年齢の半分以下じゃん!」

「変態よね」

見え……………。

「自分の側仕え護衛の筋肉集団以外全員見目のいい女の子ばっかだ

し」

「そこまで!?!」

「この前会ったときは13の姪が可愛いだとか純粹なところがイイだとか一時間くらい自慢話に付き合わされたし」

「……うわあ」

「しかもその姪には自分の存在認知されてないのよね」

「既にストーカー!?!」

「見えます!?!」

えー見えます見えましたともつ。今思えばあの人どー見ても変態親父にしか見えませんでした。あれですあれ。総務部のセクハラが原因で地方にとばされた係長が確かあんな感じでした。同期が被害にあってそれを助けた同僚が後任の係長になって付き合いだして僅か一ヶ月でゴールインしたんでよく覚えてます! クロちゃんは変態セクハラ50男でした!

「コーノさんちよつと涙目」

「そんなこと無いです!」

「見て見ぬフリしろよロクシー。男は女に泣いてるとこなんて見せたくないんだ。勿論俺もな。特にお前には」

「リスト……」

今更ですが私最近不幸ですよ。(後書き)

長くなるので二つに分けます。中途半端なところで切ってしまっ
すみません。

補足

これから物語中で説明しますが簡単にまとめておきます。

王家

勇者の末裔

北	エナーシャ	デーン家	サジュとリスト
南	キャメリアム	カシル家	
東	ブルボン	シュミレイ家	
西	クロシカル	ロスト家	ルメニア

勇者の名前がそれぞれの家の名前になったのです。
影響力を持つのは自分の国の王家に対してなのです。(三話参照)

10月23日、誤字修正。

今更ですが私最近不幸ですよねその？。(前書き)

最近なんだか鈴さんが壊れてます。

日頃のストレスが爆発したのでしょうか

今更ですが私最近不幸ですよねその？。

見つめ合うリストさんとロクシーさん。

切ない系のBGMがかかる中ピンク色のオーラを纏い二人の世界へ突入。

……………ぶちっ。

「ちよつとそこ！勝手に盛り上がらないで下さい。それにリストさん！私は男じゃありませんっ」

「女として見れねえ」

……………ぶちぶちっ。

「ブロークンハートおっっ！！激しくブロークン！ちよつとリストさんアナター日に何回人の心折れば気が済むんですかっ！？貴方とルメニアさんの心無い会話で既にズタボロな心が一気に壊れましたよ！

貴方学芸員じゃなくて本職ハートクラッシュャーですなっ！？」

ああああ最近色々切れやすくなってるわね忍耐とか忍耐とか忍耐とかねっ！

「鴻乃さん落ち着いて」

「落ち着いていられますかっ！さっきまで話してた相手が実はキレ者変態親父でリストさんには会ってまだ一日も経ってないのに男認識ですよ！？何ですか？何なんですか私何かしました？男っぽい言

動とりましたか！？元彼のお前女捨ててるって言葉思い出しちゃったじゃないですかあうわーん」

「そんな事言われたんだ」

「その男最低だな。同じ男として許せねえ」

「コーノさん……」

「いやだから落ち着いてって」

「同情の目で見ないで下さいっ！っていうかルメニアさんも同情して下さいよお」

「どっちよ」

「ええええいルメニアさんもルメニアさんです！貴方の人間関係どうなってるんですか！？頭弱いフリして実は賢人ロリコンが親しい知人でハートクラツシャーが友達！？その内絶対SM嬢とかオネエとか人情溢れる借金取りとか出てきますよねっ！？」

「最後はいないな……」

「他はいるんですか！！どうなってるんですルメニアさんの周り！既にここに腹黒とハートクラツシャーと天然がいるしっ！どんなテンプレ目指してるんです何のフラグ立てたいんですかあっ！！無駄にキヤラ濃いいいい！！」

「『類は友をよぶ』と言う」

「こつちにもあるんですねその諺！今分かりました多分それ最初に言った人は私みたいに平々凡々日常をこよなく愛する何処にでもいる普通の小市民だったんですね！こんな感じで周囲にアクの強い人ばっか集まって半ば逃避気味に言ったんでしょね！『類は友をよぶんだからいつか俺の周りにも平凡な奴らが集まってくるそれまで耐える俺』みたいなの！」

「安心しなさい。貴方も十分アクが強くて濃いキャラしてるわ」

「うれしくないです！」

「今度こそ本つつつ当に落ち着いた？」

散々喚いて本格的に喉が痛くなり、渋々口を閉じ浅い呼吸を繰り返していたところでサジュさんが聞いた。

前々から（といても今日初対面だけ）思ってたけどこの人仲裁役ばっかだな。苦勞性。

「哀れみの視線を送られる意味は分からないんだけど、とりあえず落ち着いたみたいだね」

うつ。

「……………はい。すみませんでした」

「いいつて。誘拐直後で荒んでたんだよね。そこで次々衝撃的な事を聞けば誰だって混乱するよ」

サジユさん……。

「うん、だから君は悪くない。

君が叫んで喚いたせいで周りから怒られ白い目で見られ俺が散々頭下げて謝り通したけど別に全くほんとに悪くない」

「いやあのほんつとーにすみませんでした!」

ごめんなさいごめんなさいすみませんお願いですサジユさんそんな顔で笑わないで下さい怖いいい

「それよりコーノさん、クロちゃんは何の用だったの?」

ロクシーさんが女神に見える。

というかクロちゃん定着中。

「……………さあ?何かよく分かんなかったんですね。最初は私を殺すつもりだったっぽいんですけど、ちよつと話したら気に入っただから俺のスパイにしてやるぜみたいな感じに」

「は……………?」

「三王家と四家の内情探れって言われました」

「はあ?」

うんうん分かるよロクシーさん。なるよね、普通そーゆー反応する

よね。

リストさんもサジユさんも同じような顔してるし。

「…アイツがそんな事言ったの…？」

ただ一人、ルメニアさんだけが難しい顔で眉を寄せました。

「はい。あ、でも重要なのはその後で……」

皆さんにクレヴオールさんの事を話しました。

ええもう一から十まで全て話しましたよ。

だって別に口止めされてたワケじゃないしね！

全て話し終わると、辺りに沈黙が広がりました。

……あの、ちよつと、皆さん…？

正直表情がとても怖いのですが！

特にルメニアさん！

「そついつ事……」

「どついつ意味だ？ルメニア」

サジユさんの眼光がかなり鋭い。

「いや、ね…。クロークが鴻乃さんを拉致つた理由や鴻乃さんに言った言葉の意味が分かったのよ」

！！

驚きの表情でルメニアさんを見ると、眉を寄せたまま重々しく口を

開いた。

「何度も言うけど、クロークは馬鹿じゃない。

キヤメリアム王家も彼の側仕えも、勿論あんだ達もそう思ってるんでしょうけど、全部彼の演技。

彼の聡明さを知る人間って、私含め片手の指に収まる位じゃないかしら。で、アイツを知る私は自信を持ってこう言い切れるわ。無駄にこんな事するわけ無いって。そして、さっき鴻乃さんが言ってたクレヴオールって男の言葉から察するに、キヤメリアム王の行動を察知したクロークは、騙されたフリしてその男の嘘に乗ってキヤメリアム王がどう出るのか確かめたんだと思うわ。

おそらく鴻乃さんとクレヴオールが話している時、クロークは近くに自分の手の者を潜ませていたはず。勿論バレないようにね。

貴方に言った内情を探れ云々は警告。鴻乃さんを通して私に話が届くのは分かってただろうし。

おそらくキヤメリアムを含んだ王家と四家はまた何か事を起こす気ね。気を付けろって事よ」

ルメニアさんの説明を聞きながら、私はクロちゃんを思いました。あのムカツク台詞の数々にはそんな意味が込められていたのか…。信じられない。

「…成程ね。話はよく分かった。で、ルメニア。お前がそんな嫌そうな表情なワケは？」

リストさんの言葉に改めてルメニアさんを見る。

うわ、本当に嫌そうな顔。

黒蜜の代わりに黒酢をかけて、小豆の代わりに納豆そえて、白玉の代わりに里芋載せて、抹茶シロップの代わりにワサビ醤油かけた宇治金時出されたらあんな顔になるな。おえ。

「クロークが私に無断でこんな事したって事は、俺は関わる気ゼロだから後はよろしくって意思表示に他ならないでしょ。全面協力する気があるなら、初めから私に計画教えてくれるだろうし、わざわざ鴻乃さんを誘拐するところから始める必要ないもの。今回の件は確実に否認なく彼にも関わるものだわ。王家を巻き込む大事件。末席だって関係なし。……—だから全部丸投げされたのよ。必要最低限の情報だけ与えてね」

「……成程なあ。素直にお前と相對すれば、絶対舌先三寸口八丁で丸め込まれて引き込まれるもんな。関わりたくなかったからお前との直接対決は避けて、面倒事だけ放り出したってか。確かに賢い」リストさんが感心したように言う。

「ちっ、あの野郎……」

……ルメニアさんだいぶ柄悪くなってる。

「あはは、普段自分がやってる事やられたから余計頭にくるんですよ。たまには我が身を省みて反省しろって事だよルメニア」

「あんたにだけは言われたくない」

サジュさん朗らかだけど内容は辛辣。

迎え撃つルメニアさんの視線は絶対零度。

………ちょ、サジュさん。仲裁役の貴方が喧嘩売らないで下さい……。リストさんはおもしろそうに傍観してるし。

……く、ここは女神を頼るしかない！

「ロクシーさん！」

「ふえ？ふあい！」

自分に振られるとは思ひもしなかったのか、呂律の回っていないロクシーさん。

……頼りない。

「冗談冗談。女の子ネチネチ虐めんのは趣味じゃないんだ。安心しなよ、鴻乃さん」

「今の台詞には大いに反論したいところだけど、時間も無いし止めとくわ。とりあえず戻るわよ」

「え？時間がない？戻る？どついう事ですか？」

全然分かりません。

「クレヴォールに言われたんでしょ？紫苑シオンを探せって。クロークの警告の内容もおそらく紫苑絡み。全ての元凶はアイツ。とりあえずフラフラどっかほつつき歩いてる紫苑見つけないと、話が進まないでしょ？」

「な、成程」

「だから戻って旅支度。ウィルアーロ大陸放浪記の始まりよ。それにさっきこんな大通りで騒いじゃったから、他の家の奴らも接触計ってくる可能性が高いし。さっさとズラかりましょう」

し、知らなかった……。

ルメニアさん超インドア派だと思ってたけど意外と行動派。

「座右の銘は思い立ったらすぐ行動。好きな言葉は時は金なり。というかさつさと面倒事終わらせて機械弄りたい」

……あー、そうか。最後が心情の九割を占めてるんですね。

今更ですが私最近不幸ですよねその？。(後書き)

10月23日、誤字修正

すみません私異世界なめてました。(前書き)

ええっと…月1で更新できたらいいなーってレベルになってしまっ
た気がします。

……………頑張ります。

すみません私異世界なめてました。

新幹線。

え？うん、そうそう。のぞみとかひかりとかのアレ。

高速で運転される標準軌間の幹線鉄道by広辞苑。

いやー、うん、ね。

世の中って便利だね。

鴻乃鈴25歳独身でも彼氏は募集してないわよ、などこにでもいるごく普通のOLです。

毎日平凡に生きてきた私は、最近たいへんデンジャラスな経験をしました。

いえ、現在進行形で経験してます。

まとめてみましょう。

異世界トリップ 拉致られる 見放される 男扱いされる 旅に出る

……… 人生って何だっけ。

……… ゴホン。よし、自力で現実逃避から帰還完了。この調子で頑張ろう。

さて、話を戻しましょう。

色々あって、元の世界に帰る方法と前異世界人シオン・スバルさんを探す旅に出ることになった私+他四名。

ルメニアさんの言う“旅支度”をしてる時点であれ？と思ったんだけど何も突っ込めないままここまで来ちゃいました。

そう。

新幹線の中です。

……はい。皆さんどう思いました？え？やっと冒頭と繋がった？うん？で、何でそんなこと言ったただけにわざわざこんな長ったらしい前置きしたかって？いやそこは今までのまとめというか作者に文才無くて長つたらしくなっty……ゴニョゴニョ。はいはい言いますよ。だつて。

「旅ってこんな楽でいいんですかあつ！？」

いやさあ、旅って言葉から私が想像したのは徒歩で地味に地道にテクテク山道行くとか野宿とか自炊とかとかとか！某日本発世界的人気アニメの黄色いネズミが友達という永遠の十歳の主人公だつてテクテク頑張つてんのになんかこう罪悪感みたいなのが。

「山道歩いてたら何年たつても紫苑にたどり着けないわ。そもそも教導会外にさえ出られずに終わるわね」

一刀両断されました。

いやまあ正論ですけどね。あんな高い山登れません私。標高富士山の軽く二倍はあつたからね。

うん。よく考えなくてもこの世界地球よりも科学進歩してたし移動に新幹線使うのは全く不思議じゃないんだけどね。でも。

「なんか言いたいことあるなら口で言ってください」

「最近ラノベなんかで異世界に召還される勇者の話とか多いんですけどたいがい勇者は地味に地道にテクテク道無き道を旅してるんで

なんとなく私もそんなのかな〜みたいなやつは異世界の旅「人間の足の限界に挑戦の図式が成り立っている」といふか、いや科学力が凄いのは知ってましたけどイメージは抜けないっていふか」

「ごめんなさい。言ってることの半分も理解できないわ」

「イエいいですよお気になさらず。ただちょっとRPG気分を味わいたかったっていふか」

「RPG?」

最近気づいたけど(というか今)、この世界では諺も外来語も通じる。ただ、単にこっちの世界の似た意味の言葉に置き換えられてるだけなのよね。だからこっちに無い概念の言葉は翻訳しようがなくて伝わらないのか。

「ロールプレイングゲームの略です。面倒なんで説明は無し。あああでもFFとかドラクエとかちょっと憧れてただけだなあ」

趣味：ゲームです。とか職場では公言できなかったから、誰も知らないけど。

……いや、一人だけいたな。

「コーノさんの世界には面白い物がたくさんあるんですねえ」

過去に沈みかけた思考を、慌てて引き戻す。

「…そうですか？私からすれば、この世界の方が面白いと思います
が」

これは本当だ。

今乗ってる新幹線（漂流鉄道というらしい。不吉な名前だ）をはじめ、旅支度の時に使った、初期の方にブルマがよく使用してたカプセルみたいな部屋一つ丸々収納できる機械とか、ルメニアさんの作品達とか“魔法”とか…………。

「レイちゃんの中には魔法はないんだ？」

「はい。というかこの“科学”が私の世界の人にとっては魔法みたいなもんで…………」

す。と言う前に気づいてルメニアさんを窺った。

……………うわぁ。

イラツとした表情は美人がすると何倍もの威力を発揮する事が実証されました。

困る私に苦笑して、リストさんが言う。

「あー、気にするなって。つーかルメニアもいい加減過剰反応止めるよな。レイちゃん固まってんじゃん」

「……………リストごときになだめられた……………」

「おいテメエごときって何だごときって。年上に向かってなんつー口のきき方してんだコラ」

「あら失礼、言葉通りの意味だったんですけど。理解できなかったんですか。語彙が貧困ですね、リストさん。でも気にしなくていいですよ。三つも下の女になめられまくってても、貴方の凶太さと無神経さがあれば生きていけます。馬鹿が生きててはいけないという法律はないんですから。良かったですね、リストさん」

ルメニアさんの超棒読み＋早口＆目そらしの台詞にリストさんの額に青筋が浮かぶ。

「…お前とは一度じっくり話し合わねえといけねえな」

…仲悪いんですかねえこの二人。というかルメニアさん、無神経さがあるってちょっとおかしくないですか？

うん、まあでもとにかく私の失言は有耶無耶になったみたいだし良かった良かった。リストさんには悪いけど。それにしてもルメニアさん、なんでそんなに科学と魔法を同列に並べられるの嫌なんですかねえ。

ちなみに二人の言い争いを、ロクシーさんは終始オロオロ見つめていて仲裁の役には全くたたず、一番頼りになるであろうサジユさんは、車内に入った瞬間早々に寝てしまったので右に同じ。止める者のいない言い争いは、下車駅に着くまでずーっと繰り広げられていたそうです。

え？私？私は寝ましたよ。喧嘩の仲裁なんか無理無理。めんど…
…今までの疲れが溜まってて眠かったのよ。

すみません私異世界なめてました。(後書き)

メインの五人+@の年齢大公開すべしやる。

まああらすじとか各話のタイトルとかそもそも本文とかでお気づき
でしょうが。

鴻乃鈴	25歳
ルメニア	23歳
ロクシー	23歳
サジユ	26歳
リスト	26歳
*シオン・スバル	27歳

こんな感じですよ。

鴻乃さんは鳥山明さんの大ファンの様ですね。私も好き。

閑話：異世界人（女）観察記録。（前書き）

ルメニア視点。

時系列は前話の続きです。

閑話：異世界人（女）観察記録。

某日、また異世界から人が来た。

初日

五年前に紫苑シオンがいた場所に彼女はいた。
歳は20代。私よりいくつか上だと推定される。
セミロングの茶髪に茶色っぽい黒の瞳。
……あら。
地味に美人。

「こしのねい鴻乃鈴と申します」

これが彼女の第一声だった。

……。
……。
……。

面倒。

やっぱり箇条書きで良いわ。

- ・ 鴻乃鈴
- ・ 25歳

- ・紫苑と同郷（だと思われる）
- ・順応性が高い
- ・長い物には巻かれる人生
- ・愛想がいい
- ・すでに独自の情報網を持っている
- ・基本的に楽観的
- ・割と利己的
- ・料理上手
- ・掃除上手
- ・マイペース
- ・最近図々しい

「何これルメニア」

「鴻乃さんの調書」

「…本気で言ってる？」

「どうしてそんな『お願いだ頼むから嘘だと言ってくれ』って顔されなきゃならないのよ。」

「…最初の方物語調なのは何で？」

「だって普通の考察にしたら読むの退屈じゃない。私の心情に沿って書けば書くのも読むのも楽しいかしらと思って」

「すぐ挫折してるけどね」

「思ったより面倒だった」

リストとロクシーの溜息が重なった。

「ロクシーちゃん。どう思う？つかどうにかならないのこの人もー俺は何していいかわかんないよー」

「リストその口調やめて。…ルメニアはもうどうにもならないわ。諦めましょう。私が七歳の時に出会ったときからすでにこの性格は形成されてたもの……今更変えられないわ」

眉を寄せる。

会話の内容にはなくいきなり肩に掛かった重さにだけど。

「責められてるね、ルメニア」

「おはようサジユ。一生起きなくて良かったのに」

「うん。期待に添えなくてごめんね」

笑顔で謝られると殺意が湧くわ。

「リスト、ロクシー、何見てたの？」

「お、サジユ。これこれ。ルメニア筆のレイちゃんの調書だよ」

へえ……。そう言いながら紙を受け取るサジユ。

ざっと一読み、吹き出した。

「っ、くく。ルメニアらしいね」

「どづいう意味よ」

「いや、うん、ねえ」

「答えになってない」

「まあまあ。で、ルメニア。何で二人に呆れられてたわけ？想像つくけど」

「これ見りゃわかるだろ、リスト。レイちゃんがこの世界に来たとき、『なんか異世界からまた人が来たんだけど。とりあえずうちで保護してるけど、今後の事話したいから近いうちに集まろう。場所と時間は誰か考えといて。異世界人の名前は鴻乃鈴。歳は25。他の詳しいことは後日伝えるから。じゃ、そういうことで』とか一方的に電話してきた挙げ句結局今の今までレイちゃんの”詳しいこと”を全く話さずいざ教えられた内容はすでに知ってたりどうでも良かったりするものばかりってどづいう事だよオイ」

「すばらしい肺活量だね」

「つつこみどころはそこじゃねえ」

「あはは」

「笑うな！」

「悪い悪い。ところでルメニア、いくつか質問」

「何？」

「料理や掃除上手って書く必要あるの？」

「だって意外じゃない」

「…失礼なこと言ってる自覚ある？」

「あるけど何か問題が？」

「うんよしわかった次いこう次。えーっと、マイペースってどんなところが？」

「規則正しい生活リズムだけど、いつの間にかどこかに行っていたり何かしてたりするわね。脈絡なく話題変わったり自分が言いたしたのにすぐ飽きて放置とかざらにあるし」

「…俺そついう人物もう一人知ってる」

「私はマイペースじゃなくて自分本位なだけよ」

「更に悪いね」

ロクシーもリストも何かぶつぶつ言ってる。自覚してるんですねー。聞き直ってますねーってちょっとどどついうことよ。

「あー、じゃあ最後。最近図々しいって何？」

……………。

『鴻乃さん。私が外出してた間に何があったの？』

『えー、いやですねー。そんないつも以上に無表情で言わないで下さいよ。普通にご飯食べて寝てました』

『じゃあ何で大量の飲食店の伝票と散乱した菓子類の箱と明らかに人に使われたクッションがあるんですか』

『別にルメニアさんが留守の間に近所の奥様方をお呼びしてルメニアさんを肴にお茶会なんてしてませんよ』

『……………』
『してませんよ』

……………。

いや明らかに茶話会開いてましたよね。

「分かったルメニアもう聞かない。今の忘れて。だからそんな遠い目しないで」

普通人んちで勝手にお茶会開く？どうなの人として。大人として。絶対茶代は出さないわ。だいたい人様の家で養われてる身で好き勝手やりたい放題っていったい何考えてるんですか鴻乃さん。

「ルメニア相当きてるね」

「すごいなレイちゃん、ルメニアを憔悴させるってどんだけ」

「ある意味傍若無人だもんね、ルメニア。その上に行く人がいたなんて……………」

外野うるさい。

「でもルメニア、結構良好な関係を培ってるんじゃない？鴻乃さん

と」

「そうそう。俺らなんて『嫌いよ！貴方達なんかっ！』って言われたし」

「……………そうは言われてなかったでしょ。まあ、でも。ルメニアなら嫌いな人間だったら即座に家から叩き出してるでしょうから、言う程嫌ってないんでしょ？」

「あー、だよな。保護すべき人とか、ほつたらかすと色々複雑な事情が絡んでくるとか無視して身ぐるみ剥いで一文無しで追い出すな」

「というか、そもそもこんな厄介事を、ルメニアが進んで引き受けたのが驚きだね」

「うんうん。拾って保護したって聞いた時はおもわず嘘お！って叫んじゃった」

「だよなー。あり得ない親切だよなー。見知らぬ人間が視界に入っただ瞬間踵を返しそうなのに」

「鴻乃さん風に言うなら、ルメニアはフラグクラッシュャーだからね」

「俺を見ながら言うなサジユ」

外野うるさい。

「でも、ほんとに何で助けようって思ったの？」

……………。

「寝たふり決め込んでるね」

.....。

「もー、私にくらい教えてくれてもいいじゃないルメニア」

.....。

「諦めよーぜ。ルメニアは一度言わないって決めたことは絶対言わないだろ。口堅くて尚かつ頑固だからな」

.....。

すう。

「え、マジ寝？」

「リスト黙って。∴ルメニアの寝顔久しぶり。か、可愛いっ」

「口を開けば毒しか吐かないもんな」

「ほんとに黙れよリスト」

「サジユ∴こついう時くらい『見るな、減る』とかお決まりの台詞言ってもいいんじゃないかね？」

「リスト、お前の頭はもう本当に悲しいくらい沸いてるんだね。可哀想に」

「…表に出るや」

「暴力的な言動は嫌われちゃうよ？」

「もう、二人とも他の車両行きなよ。私ルメニアとコーノさんの間に挟まれて寝るから」

「何その幸せポジション」

「ロクシーってさ、絶対女の子のが好きだよ。学生時代もそうだったし。リストよく捕まえたな」

「苦労したよ」

「うふふ。でも私、正直ルメニアとリストだとルメニアが好き」

「「え」

「じゃ、おやすみ」

「……」

「……」

「……頑張れリスト」

「……おじ」

馬鹿話しかしないのか私の周りの人間は。
大女優も真っ青な見事な寝たふりを決め込んでいたルメニアは、心
の中で嘆息した。

閑話：異世界人（女）観察記録。（後書き）

はい。初その他視点でした。

前書きとタイトルに偽りあり。

これルメニア視点って言うの？ほとんど心情でてないじゃん。観察記録って全然記録じゃないじゃん。などの苦情は受けつけません、はい。

えー、更新が遅れた挙げ句、番外編という、本編をお楽しみにしてください。更新が遅れた方にはたいへん申し訳ない感じの15話目ですが、広い心で受け止めてくださるとありがたいです。

ロクシーさんと話そう。

「起きて下さい、コーノさん。着きましたよー」

「あと一二時間……」

「長いっ」

睡眠って素晴らしいわよね。私この世で寝ることが一番好き。

休日の朝イチに映画行くの嫌で布団の中から友達との待ち合わせドタキャンメール送った中学時代。

デート中に睡魔に負けて映画館で大いびきかいた高校時代。

サークル内で恋愛映画の話題で盛り上がってるのを尻目に（眠くて）帰った大学時代。

次々と懐かしい思い出が溢れてくるわ。

「…映画嫌いなんですか？」

あのですね。暗い、いす有り、BGM付き。この三つが揃って眠くならない人が何処にいるんですか。あの空間は一種の催眠効果を持つマジックハウスなんです。嫌いなんてとんでもない。ただ私にとって、映画館は映画を見るためのモノではなくて、不眠に悩まされる人に重宝のホスピタルとしか思えないというか。

「とても珍しい考えですね」

えー？まさか。いっぱいいますって絶対。そもそもですね、映画館というのは……あ？

「私声に出してる？」

驚いて目を開けると、目の前には固まるロクシーさん。あ、口半開き可愛い。

その横にはルメニアさんサジュさんリストさん。それぞれ呆れてたり笑い堪えてたり爆笑してたり。誰がどれかのご想像にお任せします。

「はあ、ばつちり」

うわー。最近多いなあーって思ってたけどダメだな私。心の声と現実の声も分けられないなんて社会人失格。どうしよう。

「（どうでもいいから）とりあえず出ない？」

でも、相手の心を読みとる対人スキルは上がってるみたいだから、プラマイゼロになるかしら？

「……………いや、今のルメニアの括弧内の台詞はこの場の全員に伝わってるから」

…ですよねえ。

ぼーっとしてる間に車外に連れ出され、ホームを抜けてタクシー拾ってホテルに着きました。

……………展開早い？

そんなこと言わないで。どうでもいいことは割愛割愛。

…うーんそれにしてもやっぱりこの世界凄いなあ。ここ来るまでの道
のりで見た風景忘れられないよ。

王制なのに現代日本より科学進んでるって超不思議。

町並みもさ、教導会は、なんていうの？神殿？みたいな感じで、町
はヨーロッパの田舎っぽい雰囲気だったんだけど、ここは the・
中華。豪華絢爛、金殿玉楼を地でいく感じ。すんごい綺麗綺麗しい
わ。カタカナじゃなくて感じて綺麗綺麗。当て字だけど正にこんな
イメージよ。道行く人の服装もチャイナ服だし。いえ、私達みたい
な普通の服の人もなくさんいます。

…でも皆さん話されてる言葉は私にも理解できちゃうこの世界共通
の言葉なワケで。

違和感違和感。

なんて事を考えてるとリストさんが口を開きました。

「じゃ、別行動で」

…え？

そのまま立ち上がってサジユさん連れて部屋から出て行かれました。

あ、勿論このホテル（ホテル！）も中華風。
って。

「えええ待つて待つて誰か説明して下さい！」

おもわず叫んだ私を誰が責められようか、いや誰もいまい。

「鴻乃さんうるさい」

いました。

ルメニアさんの、鬼。

「言葉には出てないけど顔に思いつきり出てるわよ」

「ごめんなさいルメニアさんは鬼じゃないです見ず知らずの怪しい私を保護して下さったたいへん優しい御方ですすみません」

謝ったのにルメニアさんは超スルーでパソコン取り出して何か作業し始めました。

…謝ったのに。

…謝ったのに！

「コーノさん、気にしないで。ルメニアはいつもこうだから。ごめんね」

ロクシーさーん！

もおやバイ惚れちゃうよロクシーさん！素敵ロクシーさん！後光が見える！心のオアシス！

「ほんと、皆自由人だから…。何の説明もなく勝手に連れて来ちゃつてごめんなさい。

漂流鉄道の中で説明できれば良かったんだけど…」

あ、私熟睡してた。

「いえ、いえいえいえいえ。私が図太く惰眠を貪ってたのが悪いんです！今教えて頂ければ別に！」

そっか。一応説明しようという気持ちはあったのか。ということとは私が寝たせいでそれが出来なかったということ……。え、私が悪いじゃんマジ。それなのに責めてごめんなさいロクシーさん。貴方

が謝る必要は何処にもありません。だってサジユさん寝てたしルメニアさんとリストさんは喧嘩してたしでとてもこれから重要な話をするようには見えなかつ……。……。……。本当に説明する気あったのか？

……。

……うん、深く考えるの止めよう。

ロクシーさんと話そうその？。

「えー、じゃあまず、根本的な所から説明します」

お願いします。

「えーつとですね、ここは、大陸の南にあるキャメリアム国です」

キャメリアムっていうと……クロちゃんの本国ですか。

「コーノさんを誘拐した狸親父ためきんじい兼ルメニアの知人のクロちゃんがいる国ですね」

今、聖母のような微笑みを浮かべた口から発せられたとは思えない単語が。

「どうかしました？コーノさん」

「……何でもないです」

この世界に関する事は深くつつこんじゃいけないって重々承知しております。

聖母なロクシーさんが実は結構口悪いとか全然どうでもいいことですよね。

「ルメニアがこの世界について何処まで話したのか知りませんが…、でも、四王家と名門四家をご存じでしたよね？」

「はい」

「今は四つの国は、比較的仲良くやってるんですけど、それでも確執は残ってしまって…、特に上流階級の間人ほどそれが顕著ですね。国交は有るので人の行き来も有るんですが、国と国を直接結ぶ交通機関が無くて、全て一度は教導会を経由しないといけないんです」

「ということは、キャメリアム国のお隣のクロシカル国に行くには、キャメリアム 教導会 クロシカルってルートで行かなきゃダメって事ね。面倒だわ。」

「教導会は絶対の中立地帯ですから、安心安全です。それに、教会から他国へ行く場合はお金が掛かりますけど、国から教導会に来る時は鉄道料金は派生しないんです。つまりそれ程費用が掛かる訳じゃない。教導会からそれぞれの首都までだいたい五時間弱くらいで着きますから、皆さん割と利用されてますよ。中流家庭の方がご家族で旅行とか」

意外と気軽に国境越えられるのね。

「まあ、私達は下手すると全国巡らないといけないので、一々教導会を経由するのは面倒かもしれませんが…‥‥‥なるべく早くシオンが見つかることを願います」

全くです。シオン、一体何処で何してるんだ。携帯くらい持つとけよ。携帯嫌いつてなんだ。会社の携帯嫌いなむかつく上司思い出したぞ！前異世界人シオン・スバル、もつと考えて行動しろ！

…‥‥‥ん？シオン？

あれ、今更だけどシオンって紫苑じゃないよなあ。いやいやまさか…‥‥‥。で、でも後でルメニアさんかサジュさんに漢字確認し

とっつ。

「…そういえば、紫苑（仮）さんはどんな方なんですか？ルメニアさん曰く、猫みたいな人、らしいですけど」

「シオン？…んー、そうね、確かにそんな感じ。顔も猫っぽかったわ」

猫っぽい顔…？ドラゴンボールのカリン様とか…？いやあれは正真正銘猫か。

「ツリ目で、瞳孔が縦長だったのよ。ああ、コーノさんは同郷なんですよ。目の色はコーノさんみたいな色だったけど、髪は真っ黒だったなあ」

私は染めてるからなー。紫苑（仮）は染めてなかったのか。あ、でも日本人で地毛が真っ黒ってむしろ珍しいような…大抵少し茶色っぽいし。黒く染めたセンもアリだなあ。

ちなみに髪の色に拘るのはちょっと白髪が気になり始めたとかそんなことは全然全く関係ないわよ。…私まだ25なのに。

「博識で、頭の回転が速かったわね。こっちの世界の情報どんどん吸収してくから驚いたわあ。ルメニアやサジュとは、私には理解できないハイスペックな会話してたし。性格はまあ…飄々として掴み所がないところがあるけど、気安くて世話好きかしらね。家事も一通りこなしちゃうし、出来ないこと無いの？って何度か聞きたくなっただなあ」

完璧人間ですか。あまり関わりたくないタイプですね。

「私から見たシオンはこんな感じ。リスト達に聞いた方がわかるかもよ？男同士、何か相通じるモノがあったかも」

リストさんにねえ……あの人説明下手そう……あ！

「そうだ！ロクシーさん！紫苑（仮）さんとサジユさんとルメニアさんの間に立ったっていう恋愛フラグについて教えて下さい！」

前ぼそつとリストさんが言ってた言葉がずうーっと気になってたのよね。この機会に是非知りたいわ。あのルメニアさんに春が！三角関係のドロドロが！

「コーノさん、目をキラキラさせてすごくワクワクしてるのに水を差すようで悪いけど、別に特に何もなかったわよ？」

「えええ」

「強いて言うなら、シオンの好きな女性が、ルメニアに似てるらしいって事くらい？本人がちらつと言ってたことがあったのよ。でも、実際の二人の関係は仲間っていうか…同志？そんな感じだったわよ。サジユとルメニアも、んー、好敵手…なのかしら。教導会の学生だった時、一位二位を争ってたしね」

そうなんですか。……つまらん。

「でも、シオンが私達の中でルメニアを一番信用してたことは確かよ。ま、気持ちは分かるわね。だってリストやサジユを信用するっていうのも……ねえ？」

自分の恋人とその兄弟を暗に信用できないって言い切るって凄いな

あ。

「ロクシーさんはどうなんですか？」

「え、私？私は…えーっと、うーん……。…、…あのね、五年前、シオンがこの世界に来た時、とある事情でこの世界は魔法と政争と権力者の思惑が複雑怪奇に入り交じったすっごく混沌とした状態にあったのね。私はその当事者で、色々と特殊な状況にあったのよ…。私とシオンの関係は、その辺の超長い話から話さないとたぶん伝わらないと思うんだけど、聞きたい？」

「遠慮します」

私今さらつと凄いこと聞いちゃった気がする。そういえば前にルメニアさん五年前色々ありまして……。って言うってたしなあ…。絶対厄介事。変なフラグは立てないに限る。スルースルー！。

「とまあ、そんな感じで今に至ります」

だいぶ略されてたけどね。そしてそれを望んだのは私だけどね。でもまあつまり。

「ルメニアさんに春は期待できないと」

「結局一番知りたかったことはそこなんですね」

あはは、いや、はい。

ロクシーさんと話そうその？。

「話を戻しますけど」

「はい」

間。

「……どこまで話しましたっけ」

ロクシーさん天然ちゃんアピール！

可愛いよね、天然！

『こののれいのなかでろくシーのこうかんどがじゅうあがった』って感じだね！

でもロクシーさんと話していると好感度のゲージは一気に上がってメーター振り切っちゃいそうだね！

だって天然発言多いもん絶対。天然行動多いもん絶対。

砂糖と塩間違えちゃったって言うもん絶対。あ、これはドジっ娘か。

うんうんうんうん素晴らしいよ天然。度が過ぎるとちよつと、ていうかかなりイラツとするとか思っつてないよ。

会社の後輩の逆ハー作りまくってた真性の天然も我が子のように可愛かったよ。

『ああつ！先輩どうしましょう！A社とB社の書類間違えて入力しちゃいましたあ！』

『鴻乃さん、ほら、この子まだ入社して日が浅いし。そんなに怒らないであげて』

『おい、鴻乃。お前今手えあいてたる。手伝ってやれ』

『というか代わりにやっちゃえば？そっちの方が早いんじゃない？』
『そーですよー。センパイ仕事出来るしー。あ、君はお茶入れてきて。ここはいいから』

『先輩本っ当にすみませんでしたあああっ！』
はん。あんたは天然っていうか仕事出来ないだけでしょうが。

「…コーノさん、あの、今の別に天然発言じゃないっていうか…。
シオンの話してたらちよつと忘れちゃっただけで…。あ、ありますよね、ありますよねそっていう事！だからそんな天然ウザイって発言と荒んだ目でこつち見るの止めて下さい！！」

「あら私口に出してました？」

「絶対、意図的に、出してたじゃないですか！」

ロクシーさん、ごめんね。

そうだよね、ちよつと意地悪でしたね。いや、うん、だってね……

「あの後輩、口を開けば『…何でしたっけ』『…言いましたっけ』
『…聞きましたっけ』しか言わないから（私限定）、ちよつと記憶が触発されちゃいました」

確かにいい子なのよ。ただ、一々言動が私に喧嘩売ってると思えなかったっていうか。周りの男も何故か私にはかり尻ぬぐいさせてたしね！そんなに言うならお前らがやれよって何度か思うくらいにはね！

「なるべくその三つは言わないようにします」

「是非そうして下さい」

どうしてこんな面倒事、つまりは私を拾って助けるなんて事、してくれるのかしら。…今更だけど。

「…キヤメリアム国は商業が盛んで、情報もすごく溢れてますので、人捜しにはもってこいの国です」

ナイスロクシーさん。スルーしてくれてありがとう。

というか、ふーん。へえ、やっぱり国ごとに特色はあるんですねえ。…でも。

「あのお、クロちゃんに誘拐された時、クレヴォールさんは、”王の命で”シオンを探せ…とおっしゃってました。キヤメリアム国王がそんな事言うってことは、自国には探してもいなかっただって事で…、つまり、この国には紫苑（仮）さんはいない可能性が高いんじゃない…」

「その懸念は最もです。と、いいですか、ぶっちゃけ私達も九割九分キヤメリアムにシオンはいないと思ってますし」

はい？

「キヤメリアム王は賢く、また、狡猾な人物らしいですから、自国はそれはもう隅から隅まで調べ尽くしているでしょうね」

はい？

「ですがここは商業都市。物と共に人の流入出も多いんです。つまり、他国の人間も多い。そういう人を中心に情報収集すれば、シオンのいる国を特定出来るかもしれません」

…成程。

「もう一つ理由があつて…まあ、宣戦布告でしょうか」

…随分殺伐とした理由ですね。

「ルメニアがクロちゃんに対してすごく怒つてまして…。多分近日中にクロちゃんとコンタクトとって協力させると思っていますよ。あとはキャメリアム王に対する当てつけですかね。…宣戦布告っていうのは、他国の人間に私達がシオンを探していることを大々的に告知することを指します」

「…はーん。情報が飛び交い人の出入りが激しいこの都市は、他国の諜報員なんかにももつてこいな場所つて事ね。その人達は、私達が紫苑（仮）さんを探してるつて知ったら、自国のお偉いさんに報告するだろうし。ここで紫苑（仮）さんを探すことは、私達はシオンを探していますよーつてアピールする事に他ならないつてワケ」

「お察しの通りです。シオンが来たとき、彼を含め私達、結構派手に動いちゃつて。各国の要人は私達やシオンの存在を認知してるんですよ。権力者の欲は止まることを知らないつていうか、少しでも利用価値のある存在は手元に置いておきたいみたいで、シオンを狙っているわけです。彼が旅をしているのはそのせいでもあるんですが…。とまあ、シオンという前例があるので、コーノさんのことは極力秘密にしてたんですけど、多分もう全ての国にバレてるでしょうから、堂々としてOKですよ。私達もついていますし。…でも、リストが言つてた様に、王家と四家に関わるのは止めて下さいね。不可抗力でも止めて下さいね」

「不可抗力は自分でもどうしようもないから不可抗力なんじゃない

ですか」

「コーノさんの場合は、その言葉を言い訳にして、何とかかなりそうな場面でも何の努力もしなさそうなんで言ってるんです」

そ。

「反論は受け付けません」

うう。

そ、そんなドキッぱり断言するなんてひ、ひどいわなな何を言ってるのああ貴方はッ！って言おうと思ったのに先手を打たれました。残念。

「ここで活動することによって、他国からのアプローチも増えると思いますけど、コーノさんに被害の無い様にしますから、安心して下さい。……ちなみに危機感を捨てると言ってるわけではありませんせんからね？」

そんな念を押さなくても。

「余談ですが、各国に目を付けられている私達が今の今まで安穏と生活できていたのは、私達が、教導会にいたからです。教導会は、絶対の中立地帯。さすがにどの国も、教導会にまで手出しは出来なかつた様ですね。…それと、さつきキヤメリアム王への当てつけと言ったのは、本来教導会から出る事はないだろう私達が、真っ先に来たのがルメニアの実家のクロシカルでも、リスト達の実家のエナーシヤでもなく、全く関係ないキヤメリアム国だという事実に対して、他の国が色々勘ぐって、キヤメリアム国を糾弾するだろう事をルメニアが見通してイイ気味とか言いながらほくそ笑んでいた事を

思い出してついつい口がすべってしまったとか、そんな事は全然ありませんから！」

…私何も言っていないんだから、言わなきゃ余計なことバレなかったのに。

……話逸らした方がいいかしら。

「…えと、キャメリアム以下の順番はどうやって決まったんですか？」

「同じく情報流通量の大きさ順です。キャメリアムで全く情報が得られなかった場合の順番ですから、多分この通りに行くことは無いと思うんですけど」

へえ。

「じゃ、ルメニアさんの故郷のクロシカルって、閉鎖的な国なんですか？」

だって一番最後だし。

「ええ」

端的な答えですが、とってもしみじみとした言い方です。なにやら経験則っぽい。……あ。

「もしかして、ロクシーさんの実家もクロシカルにあるとか」

「いいえ、私は教導会生まれ教導会育ちです」

にこりと、聖母のように微笑まれる。

……この時、私は気づかなかった。その笑みは、自然に口元に刻まれたと言うには、あまりにも機械的な動作だったことに。そして、こちらを気にする素振りを全く見せなかったルメニアさんが、強い視線で私達を見つめたことに。

ロクシーさんと話そうその？。

「んー、と。あ、リスト達は何処に行ったか、私達が何をするか
の説明をしますね！」

私達は、部屋で待機。リスト達は水商売のお店に行ってます」

あまりにもさらっと言われたせいで、すぐにその言葉が認識出来ま
せんでした。

え…その聖母のような微笑みを浮かべた口以下略。

「水商売？」

「あれ？そちらの世界にありません？水商売というのは、客の人気
で成り立つ収入の不確かな商売の俗称で、一般にキャバレー」

「待つて待つて待つてストップっ！」

口を閉じるロクシーさん。

び、びつくりしたあ。結構あけすけにモノを言うのね貴方。お姉さ
ん驚いたわあ。

「すみません、コーノさん。意外と純情な方なんです…」

意外って何。

「や、違いますから。というか、私も過去、そういう商売してまし
たし」

高校生の時かなー。あの頃は色々諸事情あってお金が欲しかったのよねー。懐かしー。

「私が聞きたいのは、どうしてそういうお店に二人が行ったのかって事です」

確かに時間的には丁度良いけど。

私のサラッと告白に一瞬目を見開いたロクシーさんは、ああ、と頷きながら説明して下さいました。

「先程は、私達は部屋で待機って言いましたけど、正直これから寝るくらいしかする事無いんですよ。まあ、今日の疲れをたっぷり取るという事で。男二人は別の方法で疲れを癒すために夜の蝶達の元に行き」

「ダウトオオオっつー!!」

「というわけでは勿論なく」

うおう本気で驚いた。ロクシーさんそういう冗談言う人だったんですか。何それ何それ、お姉さんびっくり。あ、この台詞ちよっと違うけど二度目だ。語彙が豊富な人羨ましい。代わりにこの驚きを代弁して欲しい。

「そういう商売の人って、かなりの情報通なんです。お酒の入ったお客さんがポロポロ情報漏らしますし。コーノさんも経験ありません?と、いうわけでリスト達は情報収集。私達は生物学上女なので、お店に入れません。なので、ここで待機。まあルメニアの作業が終われば私達も出かけますけど」

へー。そ、そつかあ。でもリストさん達がいる所は高級クラブなんだろうな。私が働いてたところは安月給のサラリーマンしか来なかったし。重大な情報持つてる人なんて来なかったし。

「…ちなみにー、私達は何処に行くんでしょうかー？」

何故かしら。嫌な予感がヒシヒシと。

ー案の定。

「女衛せげんの人達に、会いに行きましょう」

ロクシーさん。聖母の様な微笑み以下略……………しくしく。

ロクシーさんと話そうその？。(後書き)

水商売(広辞苑参考)

この服いくらするんだろう。

私達は今、キラッキラのお兄さん達に囲まれてお茶しています。ここ何処のホストクラブですか。

右隣にルメニアさん、左隣にロクシーさん。美女二人に挟まれる肩身の狭さ、誰か分かって下さいと切実に思います。

伏せていた目を少し上げると、視界に広がるのは紫煙がいくつも立ちのぼる薄暗い半個室の空間。意匠の凝った装飾が至る所に施されていて、華美な内装ですが、嫌みになりすぎず、たいへん趣味の良いいお部屋だと思います。クロちゃんちとは大違い。

あああドキドキします緊張します耐えられませんこの空気。ちよつと動くだけでしゃらしゃら鳴るこの服もどうにかありませんか。

そうですねなんです私今チャイナ服ですしかも派手。

長く大きく入ったスリット。真っ黒な地に金色の刺繍の牡丹の花が良く栄える、見る分には申し分ない素晴らしい衣装です。

何連だか分からない腕輪や大きな丸い耳環、結われた髪にゴテゴテと装飾品を飾られるのだから、着るのが私じゃなければ傾国の美姫にさえ見える美しさだと思います。初めて目にした時は叫びましたもん心で。何コレ楊貴妃!?(見たこと無いけど)と。

……た、耐えられない。耐えられないよ本当に!地味な私には荷が重すぎるよ!両隣の二人くらい美人だったら楽しいんだけどさあ!ルメニアさんは淡い紫のチャイナ服。私とお揃いだけど、装飾品は銀。でも明らかに私に比べて少ない。髪だって結ってあるけど花簪一本だけだし。

ロクシーさんは光沢のある翡翠色の服に、同じく銀の装飾品。髪は下ろして大きな白い牡丹を挿してる。

綺麗だなあ。素敵だなあ。できたら私はこの間じゃなくて、二人の正面に座って存分に愛でる方に行きたかったなあ。

女衛のお兄さん達羨ましい。
心から思った。

時間は少し遡る。

ロクシーさんの衝撃的な発言を最後に、そのままグダグダと違う話（恋いバナとか、仕事の愚痴とか）に突入して盛り上がっているとルメニアさんがパタンとパソコンを閉じて一言。

「竜宮殿に行くわよ」

そのまま立ち上がり歩き出したのを見て、ロクシーさんが私の手を引き後を追った。

竜宮殿………亀さんと浦島さんが出てくるお話を思い起こさせる名前だけど、さっきの話の流れからいって、たぶん女衛さんがいっぱいいるとこなんだろうな……。

女衛ってさ、夜の女性の幹旋業なワケじゃん。つまりその人達も情報通ってことじゃん。そして女の私達が情報収集に乗り出そうって事じゃん。うわ無理。

「ルメニアさん、ロクシーさん、無理です私出来ません」

突然何を言い出すのこの子って目で見ないで下さい。地味に傷つく。

「女衛の職に就くのは見た目綺麗な人って相場は決まってるじゃない

いですか。しかもその道のプロですよ。本心見えない無駄なキラキラ笑顔で話されたら、私情報聞き出すどころじゃないです。鳥肌立ちます。逃げます」

「リストとサジユも似た様なもんじゃない」

見事なハモリ。

ロクシーさん、どうしてリストさんと付き合ってるの？

ルメニアさん、真後ろ見ながらどうやって真っ直ぐ歩いてるの？

「違うんです。あの二人とは根本的に違うんです。リストさんやサジユさんは本人の性格じゃないですか。でもこれから会いに行く人達は、仕事柄そういう役割を演じているんです。実は素は一人称オラで語尾にだっぺを付ける純真純朴な田舎の好青年かもしれないんです。そういう人が仕事の時はあの胡散臭い0円スマイルを撒き散らしながらドン引きするような甘い台詞を吐いて女性を夜の仕事へ引っ張り込む……あああ無理無理無理！

言っただじゃないですか、私二面性ある人苦手なんです。嫌いなんです。”素”の時は話せるけど”作ってる表”と話すのは無理なんです！正直リストさん達と初めてお会いした時、いやまあ今日なんですけど、不快感いっぱい吐きそうでした。

慣れればどうって事無いし、人によって程度に差は有りますけど、女術は特にダメです！」

だって私にこのトラウマ植え付けた張本人の職業だしね！

涙目で全力で拒否する私にルメニアさんはー！

「じゃあ今日そのトラウマを克服しましょう。さっさと行きますよ」

鬼。鬼がいる。

ルメニアさんの前世は鬼か悪魔か鬼畜にちがいない。
悪霊退散！カオスにはコスモス！こんな時のロクシーさん！

「ゴメンねコーノさん。ちょっとだけだから我慢してね」

聖母が悪魔に魂を売り渡した。

「勝負時は派手に装うの。ハツタリは大切よ」

ルメニアさんの言葉に、高そうなお店に入った。ロクシーさんも同意見のようで、何の反論もせず後に続く。
婦人服全般を扱う店のようだ。

40そこそこの上品な店員さんが出てきて、私達を見て微笑んだ。

「今日はどういった物をお探でしょう」

「キャメリアムの伝統的な正装三人分。特にこの人一番派手に」

ルメニアさんが、「この人」のところで私を指しながら答えた。

……………え？

「かしこまりました。では皆様こちらへ」

艶やかに微笑んで颯爽と踵を返す店員さん。それと同時にもつと若くてキャピキャピした感じの…というか今時の女の子達が現れて、あれじゃないこれじゃないと服を出してはしまい出してはしまい、あれよあれよという間に着替えさせられた。
化粧も施され、これでもかと言う程飾り立てられる。

彼女たちは清々しい汗をかきながら、やりきった！といういい笑顔で下がっていった。

「皆様の目の色に合わせた衣装をご用意させて頂きました。派手に、且つ上品に。カメラリアムの正装をここまで着こなせる異国の方はなかなかいらっしやいませんわ。とてもお似合いです。良い仕事をしました」

初めに私達を迎えた店員さんが満足気に言う。

その言葉にルメニアさんは、珍しく唇に笑みを刻み……え、初めて見た。自然に微笑むルメニアさん初めて見たよ私！

「ありがとう、サロワーヌ」

「とんでもございませんわ。またのお越しをお待ちしております、ルメニア様」

店を出ると、開口一番ロクシーさんが聞いた。

「知り合い？」

私も是非聞きたい。

「サロワーヌ？ええ、まあね。共通の知人を介して知り合ったの。私が16の頃かしら」

「…ルメニアさんの人脈って幅広いですね…」

「そう？ 案外狭いものよ、世間って」

しゃらしゃらと腕輪が鳴る。

…道行く人の視線が全てこちらを見ている気がするのには私の気のせいだろうか。気のせい…うん、そうだと思いたい。だってもつと露出の多いお姉さんだって歩いてるし。派手な服の方々は他にもいっぱいいるって、うん。

しゃらしゃらしゃらり。

…気のせいだもの。凄く人通り多いのに、私達が歩く所だけ何故かさーっと人が避けて道が出来てるのとか見てないもの。うん、気のせいだ。

しめんなさい。(前書き)

更新だいが遅れて………申し訳ありません！

「じめんなさい。」

「ところでコーノさん、女衒嫌いはもういいの？」

ロクシーさんの一言ではっと思い出す。

「そうだ！そうだった！何ですかルメニアさん、私一番派手について
どういう意味ですか！私は行きたくないって言ったじゃないですか。
お二人で行けば良いんじゃない……」

「鴻乃さん」

静かな、けれど、無視できない強さで名前を呼ばれた。

「自分の立場、分かってます？きちんと、本当に、理解されてます
？」

何それ、それって

「……………どういう、意味ですか」

溜息を吐かれた。

「どうもこうも、文字通りの意味ですが。……………鴻乃さんが突然異
世界に放り込まれ、理不尽な状況にあるのは理解しています。です
が、だからといって、周囲に甘えて全て他人に任せていい、という
のはどうかと思います」

「それは……！」

「私が貴方を助けるのだって、私なりの思惑があるからです。100%の善意で貴方を助けているわけではありません。だって、貴方にどんな義理があるというんですか。わざわざ見ず知らずの人間を保護して助けなきゃいけない、どんな理由があるんですか」

それはー、それは、私も疑問に思っていたことだった。何故、ルメニアさんはここまで親身になってくれるのか。だって、面倒ごとが嫌いなのに。分かってた、分かっていたはずなのに。冷水を、浴びせられた気がした。

「貴方も自分に置き換えてみたらいかがでしょう。自分が元いた世界に、突然異世界から人が来たとして、貴方はその人間を助けますか？どんな人間かも分からない、関わりと面倒なことになる、そんなことが分かり切っているのに、可哀想、一人で心細いだろうね、私が助けてあげる…そう、手を差し出しますか…？」

答えは………否。

私はそんな出来た人間じゃないし、他の人間だってほとんどがそうだろう。自分が一番大事だし、下手なことに進んで関わりたい人間なんてそういない。

「助けたら助けたで、本人は自分の危険度を理解しないで気ままに暮らす。自分のことなのに、全て他人任せで嫌なことだけ嫌だと我が侷を言う。見捨てるのは簡単なんですよ？だって本人は何の努力もしていないんですから。一人で生きていく為にしなくてはいけないことは何一つ」

何も言えない。

反論なんて、言えない。

「酷だと思われるでしょう。確かに理不尽です。ですが、本気がどうかも分からない他人の善意に胡座をかいて渡っていける程、世の中甘くありません。」

「……私は、ある目的の為に貴方を拾って、そして今も貴方に付き合っていてあげています。ロクシーは私を信頼してくれているから、私が何故貴方に尽力しているのか、疑問に思っても深く追求せずに協力してくれています。リストとサジユも、デイン家から何か指示があるのかもしれませんが、とりあえず私を手伝ってくれています。別にそれは、貴方が心配だからではありません。誰一人、そんな理由で貴方に協力しているわけではないんです。」

「貴方は築けていますか？ 今日会ったばかりの彼らとの間に、信用を築こうという努力をしていますか？」

ルメニアさんはひたすら前を見続けていて、その時どんな表情言だったのか、知ることは出来なかった。

「では、改めて聞きます。…一緒に来ますか？」

その言葉に深く頷く。

ルメニアさんに見えるはずがないのだけど、深く、何度も。

視界の端でロクシーさんが小さく微笑むのが見えた。

「……勘違いしていた。」

ルメニアさんは私の友達でも何でもなく、ただの他人に過ぎない。彼女達なら何とかしてくれると、軽い、本当に軽い気持ちだったけれど、確かに彼女たちには私の為にそこまでしてくれる義理は無い。この世界に来たことは私にとって理不尽だけど、だからといってルメニアさん達に私のことを全て任せるのだから、彼女達にとつたら理不尽な話だ。

ルメニアさん達の惜しみのない助力を疑問に思ったことは何度かあったのに、深く考えなかった昔の自分を殴ってやりたい。今まで何も言わなかったルメニアさんにむしろびっくりだ。私を見る度に苛々していただろうに。

なのに、何も言わなかった。そして、今、忠告してくれた。

自分は善意で助けているわけじゃない。努力しろ、と。

そう。本当に。

本当に、ルメニアさんは、

「優しい」「優しい人ですね」って言ったら呆れますよ」……………」

……………。

「え、えと」

「善意で助けたわけじゃないって言った人間に何言おうとしたんですか貴方は」

「だって」

「何が『だって』ですか。鴻乃さん、本当に歳上ですか？正直私が十代の頃でも貴方より精神的に大人でした」

ええええええっ！？どうしてこの流れでダメ出し！？

はあ…と溜息を吐いてルメニアさんが振り返る。

う、うわ。本気で呆れ返ってる。あれはポーズでもフリでもなくましてや照れ隠しなんかでは全くなく心の底から素で呆れてる！くすっ。

隣で笑い声がした。

見ればロクシーさんが苦笑しながら呟く。

「あー、もう。ルメニアは」

しょうがないなあという表情だった。

「鴻乃さん」

「は、はい！」

姿勢を正してルメニアさんに向き直る。ちょっと声が裏返ったけど気にしない。というか気にしないで。

「これから私達は教導会の職員として女衞達に会いに行きます。使えるものは何でも使いたしましょう。肩書き、相手を威圧する風貌。全て使って駆け引きします。

私とロクシーは教導会の職員免許を持っているので、それを見せてとりあえず身分保証。鴻乃さんは持っていませんから、私達の上司という設定でいきましょう。偉い人は部下に喋らせてでかい態度で座つとけばいいんです。偉いんだから私からわざわざお前等に話すことなんて何も無いし、自分を提示するなんて馬鹿らしいという態度でふんぞり返っていて下さい。一番派手な格好にして貰ったんですから、偉い人という言葉に説得力はあるでしょう。

実際の取引は私とロクシーです。女衞が苦手でも、その正面に座ってるくらいは我慢して下さい。それで良いですか？」

それ、何もしなくて良いと言ってるのと同義じゃ…

「さっさと答える」

「良いです！分かりました！」

そして…

「ありがとうございます…！」

本人は否定するけど、やっぱり、ルメニアさんは、誰よりも…

「まあ素人に下手に関わられると碌な事になりませんから」

………優しい人、だよな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8883s/>

流されながら自由に生きる、それが私のポリシーです。

2011年12月11日18時53分発行